一八〇五年に、彼女は普通の家屋塗師に嫁いだ。爾來年々家族の增すに隨つて、家庭の煩累や責任はいよ〳〵重くなり、又貧苦は依然として甚だしく、實際日常の食物にも窮する程であつた。然るにかゝる困難なる生活の中に、ブラウン夫人の名を最もよく世に知らしめた名作『わづらはしき世を　しばしのがれ』が作られたので、それは實に一八一八年のことであつた。そして其の翌年『つきのかげは　うすれゆきて』が物せられた。當時夫人は四人の子持で、末子はまだ夫人の腕に抱かれてゐた。其の住家は勿論粗末で、家財什器も乏しく、體裁の整うてゐたのは、僅に一室のみであつたが、此の一室も病める姉妹の起臥する所であつた。夫人は夕刻屢々生活に不自由なき隣人の所有してをる庭園の附近の、閑靜な所に行き、其處で祈禱と靜思とに耽けつてゐた。此の庭園には、果實もあり、花卉もあつた。夫人自らは、自分が屢此處に來るのを誰も注意して見てゐるとは思はなかつた。それをある日其の富裕な人の妻が、

どうして此處に來るのかと詰り、欲しきものあらば何故家に來て公然と所望せぬかと言つた。其の婦人の語よりも、言ひ樣が痛くブラウン夫人の感情を刺激し、悲しさをこらへて我が家に歸り、兎も角も夕べになすべきだけの仕事を成し終へ、家族のものが臥床に入つたのち、幼兒を抱いたまゝ、獨り人なき臺所に來て、瀧なす涙を掃ひつゝ、筆を執つて胸に溢れた感情を一片の紙上に濺ぎ出したのが、即ち此の歌であつた。自分は何故たそがれ時に、人なき所をそゞろあるきしたかといふ理由を辯解するつもりで、翌日此の歌を心しらぬ隣人の許へ送り屆けたのが、當時の某讃美歌編纂者の知るところとなつて、基督教界に紹介され、爾來益々弘く歌はれて、信仰上に益を與ふる事となつた。

ブラウン夫人の筆に成つた讃美歌は、百五十といふ多數に達してゐる。其のうちで、爾來百年間此の歌ほど神の聖徒等に歡迎されてゐるものはない。實に此の歌あるが故に、夫人は米國女流讃美歌作者の前列に立ち得るのである。

家庭の煩累の多いにも拘はらず、ブラウン夫人は、苟も教會の利益となり、四圍の人々の幸福ともなる事の爲には、少しも勞を厭はなかつた。特に教會の爲に、内外の傳道事業に用ふる寄附をなし、その他種々の事業に幾分づゝの寄附をした。編物細工をして、傳道の資金を作りもした。そして遂に、其の子サムエルを外國傳道のために獻ぐるに到つたのである。

此の子が生れて僅に十三日目に、A. B. C. F. M. 即ち現在の會衆教會傳道會社が設けられた。此の會社の設立は、夫人が夙に祈つてゐた事であつた。併し其の子サムエルが、自ら進んで外國傳道の志望を申出でたのは、オランダ改革教會 Reformed Dutch Church の傳道會社へであつた。

夫人は又、日曜學校の爲に、有益な不朽な一例を創めて示された。それは嬰兒を教へることであつた。此の考は、夫人が屬してゐた教會で、日曜日の禮拜者が携へ來つた嬰兒を一室に集め、これに聖書の物語を聞かせて、彼等を喜ば

せ、其の間に兩親等に說教を傾聽する機會を得させるにあつた。

ブラウン博士は、後年其の母の筆に成つた此の名篇の爲に、一曲を物したことがある。そして此を Monson と名づけた。この名は母が此の歌を作つた地名から取つたのである。併し此の曲は、神の德をたゝふる歌には適するが、冥想的の歌には適當せぬので、米國の讃美歌編纂者は、大抵他の曲を此の歌にあてる。就中此の歌の副曲として『さんびか』中に收めてあるブラウンといふのは、William Batchelder Bradbury（第十六篇參照）が、一二四四年に作つたものである。曲にブラウンといふ名を附けたのは、作歌者の名譽のためであることは、了解するに難くはない。他に又 Cooling と名けた曲がある。これは一八六八年に Alonzo J. Abbey（一八二五—一八八七）の作つたものである。

第四十一

『いともたふとき　主はあもりて』"The Church's one Foundation"
（さんびか第壹編一二九・古今一六一・讃歌集一三一）

『つみをにくみつゝ　つみびとをば』"O Thou, before Whose Presence"
（さんびか第壹編三一五・讃歌集二七二）

舊約聖書中のモーセの書と稱するものゝ歴史的價値と確實性に對し、近代最も先に現はれた攻擊中に、英國教會の監督で南アフリカに派遣されてゐたColenso によつて加へられたものがある。彼は一八六二年一書を著し、其の書中に、右の攻擊辯難を記した。當時基督教會内では、コレンソー監督の懷ける如き意見と聖書のインスピレーション説とは、到底兩立せぬもので、正統派教會の信仰を離れた危險思想だと恐れた人が多かつた。さて此の問題に關して

は、爭ひの絶間なく、一時は激烈に論じあつたもので、名譽あり、材幹ある人士が此の論爭に加はつてゐた。コレンソーの意見に對し、第一に反對を表はした一人は、同じく南アフリカの監督で、其の地方最高の權威であつたCapetownの監督Grayであつた。彼は當時教會で一般に認められた信仰を辯護して、反對論者に對抗し、一面論文を以て、その蒙を啓かんと力め、又一面コレンソー監督をNatal教區より他に轉任せしめたが、此の處分は英國行政權のために取消された。これは行政權が、此の類の事柄にも最高の權力があつたからである。併しグレー監督の處置は、廣く英國教會友の稱賛を博し、特に遠く本國ロンドンに在りし一教職が、自己の教務の繁劇なる中に、一首の讃美歌を作り、以て己れが深く感激した事を公表した。即ち今此の物語の首に收めた歌がそれである。爾來四十餘年間『基督教の國歌』と仰がれ、啻に英語國のみならず、英語讃美歌を禮拜に常用せぬ國にても、此の歌は重要な地位を占めてゐる。日

本譯及び普通承認されてゐる原文に於て、其の第三節を讀めば、此の歌の作られた事情を知ることが出來る。即ち敎會内に熱烈なる爭論が起り、グレー監督も、此の爭に與るやうになつた。さるをりにも、敎會の首なる基督を深く信頼するといふ信仰は動かない。その信仰が基礎となつて、此の歌は作られたのである。

此の歌の作者 Rev. Samuel John Stone（一八三九―一九〇〇）は、一敎職の子で、オックスフォルド大學卒業の後、按手禮を受け、初は父を助けて、次には父の後任者として、ロンドンの Haggerston 敎區に傳道し、牧師としての生涯の大部分を此の敎區で過した。併し『いともたふとき　主はあもりて』の歌を作つたのは、彼がまだ副牧師として Windsor の一敎會に在職中（一八六六年）の事であつた。此の歌は初め十二首の歌を一集としたものゝうちの一首で、此の集には拉甸語で Lyra Fidelium といふ書名を附してあつた。本來此の集は使徒信經に含

んでゐる信仰個條を說かんとして、公けにしたものである。今日も同樣であるが、當時人々が兎角使徒信經を徒らに唇に上すのみで、その意味を知らんとしなかつたからである。

特に此の歌が說明せんとした所は使徒信經中で『聖公會、聖徒の交り』といふ語で言ひ現はされてゐる個條であつた。此の信仰個條に對して、此の歌あるを見ると、また我等はセシル・フランシス・アレキサンダー夫人（第二十九篇參照）が、『みやこのそとなる　をかのうへに』といふ讃美歌を作つた事情を思ひ浮べる。ストーンの作つた此の歌は、英國敎會史の上で、餘程重要な場合に歌ふことになつてゐる。其の一例を擧げると、一八八八年に開かれ、Lambeth Conference といふ名で知られてゐる、英國敎會の多くの監督以下、重要な地位にある人々の大會のをりにも、さうであつた。當時 Westminster Abbey と Canterbury と St. Paul 寺院の三ヶ所に於て大集會を開いた。起立してゐる禮拜者の

群の中を純白の法衣を着用した教職等が、此の歌を歌ひながら入場をして、人人の心に著しい好結果を與へた事であつた。

彼の名高い "Quadrilateral" といふものが發布されたのは、此のランベス會議の結果であつた。これは聖書、信仰箇條、教職及び聖禮典、歴史的書簡を基礎とし内容として記述した書簡で、英國教會から離れてゐる英語國の諸團體に宛て丶、再び國教會に歸ることを勸めたものである。

ストーンの筆に成つた歌が、尙一首『さんびか』に收めてある。即ち節制といふ標題の下の、『つみをにくみつ丶 つみびとをば』といふ歌で、一八八九年の作である。此の歌といひ『いともたふとき 主はあもりて』といひ、その他を合せて、總計五十首に下らない歌に就いて、共通せる性質とも見るべきは、作者の人格が赤裸々に現はれて、大膽なる信仰と希望とを高調し、舊約聖書中ダビデの詩を模範としてゐる事である。されば此等の歌は、ダビデの如き精神

に感じて作られたと評するが適當であらう。『いともたふとき 主はあもりて』を歌ふ時には、詩篇四十六篇第五節の『神そのなか(「なか」とはシオンの山、即ち教會をいふ)にいませば、都はうごかじ。神は朝つとに之を助けたまはん』と歌うた人の聲を聞くやうな感じがする。此の歌は、正しく世界の多くの信徒の心に、教會の理想を鼓吹したのである。

あらの丶原に、おほうみに、
山に、林に、野のまちに
ランベス塔の 高みより
ニッジーランドの 岸邊まで

* * *

一九〇〇年十一月、ストーンの葬儀が行はれた。彼の柩は既に會堂内講壇の前に置かれ、將さに式が始まらうとしてゐた靜やかな時、突然窓から一羽の鳥

が飛び入つて、しばらく囀づり、再び窓から飛び去つたと傳へられてゐる。是は鳥の世界が、此の歌人の死を悼みて遣したのかも知れぬ。此の作者も亦其の歌を以て、詩歌の世界に美を加へた人である。葬式の時、この名歌を歌ふのに用ゐた曲は、Samuel Sebastian Wesley の作 Aurelia であつた。爾來此の曲が必らず用ゐらるゝ事になつた。

此のウエスレーは、名高いウエスレー家の一人で、メソヂスト教會の讃美歌作家チャーレス・ウエスレーの孫に當る人である。彼の父も亦音樂に秀でゝゐたので、百年前には相應に著名であつた。サムエル・セバスチアンは、一八一〇年に生れ、オーガニストとして又教會音樂曲の作者編者として、有名な人となつた。此の人はオーガニストとして、英國の四大寺院に順次其の技倆を示し、其の作曲は基督教各派の歌集中に收められてゐる。オーガニストとして著名な人が、又作曲家として十分技を有つは不思議でない。此の人は以上の事實

を證明した一人である。幼時彼は Windsor の皇室會堂の、唱歌隊の一員であつたが、壯年に及んでは Edinburgh 大學の音樂教授となつたのである。彼はこの大學から音樂博士の稱號を贈られた。彼はまた一八七二年に The European Psalmist といふ表題で出版された讃美歌及び歌曲の編纂者であつた。

Aurelia といふ名の曲は『眞玉しらたま　こがねひかる』（さんびか第一編三四一・古今三七二・讃歌集三〇七）の曲として、作られたものである。そして此の歌は Bernard of Cluny（第二十八篇參照）の作つた拉甸語のを John Mason Neale が英語に飜譯したので、Aurelia 即ち黃金といふ意味の名が付けてあるのは、その爲である。姑め一般の人々に歡迎されず、又ニールの作歌及び『いともたふとき　主はあもりて』を歌ふ曲とも認られなかつたが、一八七二年ロンドンのセントポール大寺院で、當時の皇太子、後のエドワード第七世陛下の御病氣平癒感謝會の開かれた時、此の曲を用ゐたのが初めで、其の後ストーンの作歌を歌ふ曲と定まつ

て、他の歌には用ゐられなくなつた。今では人々が、初めから此の曲と歌とは分つことの出來ぬものと思ふに到つた。併し此の曲がストーンの歌以外に用ゐられてゐる一例外は、Monsell の作歌『あいのみかみよ　みまへにたつ』(O Love, Divine and tender (or golden)（さんびか第一編三七九・古今一四八・選歌集三三一）といふ結婚の歌である。

ウエスレーの筆に成つた曲が、尙一つ讃美歌に收めてある。第二編第二二九の曲が、即ちそれで。Eden と呼ばれてゐるもの。英語の "There is a happy land" といふ歌の日本譯を歌ふ曲に用ゐられてゐる。(これは夙く日本語に移された歌である)。『さんびか』第一編第三五一（古今二二七）の『あまつみくには　たのしきぞ』の曲は、作者未詳であるのを、舊版にウエスレーの作としたのは誤りである。

第四十二

『あなうるはしシオンのあさ　ひかりぞてりそめける』
"Hail to the brightness of Zion's glad morning"
（さんびか第壹編一六一・選歌集一五五）

『たふときわが主よ　かゝるわかれも』
"Jesus, while our hearts are bleeding"
（さんびか第壹編三三六）

基督の教會が、活動し發達して來た歷史をかへりみると、其の音樂の方面に身を委ねた米國人の中で、名譽ある地位は正に音樂博士 Thomas Hastings（一七八四―一八七二）の占むべきものであらう。此の人は讃美歌も數多く作つたが、其の筆に成つた曲の數は更に多く、アメリカでは人に皆知られてゐるのみならず、他の國々でも相應に知られてゐる。

一個人の傳記で、ヘスチングス博士ほど興味あるものは極めて稀であらう。人間の力では、殆んど勝ち難い困難に遇うて、能く大事業に成功したといふ見地からして、此の人の傳記は特に興味がある。幼い時から貧家に育ち、初等教育を受くるにすら慘憺たる思をなし、長の年月を經て壯年にいたるまで努力奮闘し、大都會に出で文化の中心、教養あり、閑雅にして有用なる人物の中に其の身を置き、終に音樂の方面で名をなしたのである。其の結果彼は、米國基督教會にて、單に一派の人のみでなく、全教派の人々の記憶に存する人となつたのである。

彼は幼時、其の父母と共にニューイングランドに住み、後に西部ニューヨーク州の山手で、Clinton といふ地、即ち今のハミルトン大學の所在地へ移つて來たが、當時此の地方に學校とては只一つしかなかつた。しかも住所からは六哩離れた所にあつたので、彼は毎日疲れ足をひいて遠路を往復し、此の學校に通

つた。然もその通學すら、冬期中父の農業を手傳ふべき仕事のない時に過ぎなかつた。

彼は幼時既に信者となり、音樂に趣味を有ち『美妙なる音樂にて、神の榮光を一層大ならしむる』のを一生涯の目的と定めた程の人物とて、音樂の初歩原理に早く通曉して、一八〇六年には、其の地方の學校及教會で、讃美歌隊や唱歌團を教授し始めた。それが自己の練達ともなつて、名聲を博した。一八一六年、其の筆に成つた讃美歌集を發行して、ます〳〵其の名を高くし、幾くもなく、其の住んでをつた片田舍から、州の首都なる Albany 市に出で、其の後 Syracuse で略一ヶ年新聞記者をつとめ、遂に招かれて、一八三〇年頃ニューヨーク市に行き、その地の重なる十二の大教會にて讃美歌隊を教練し、傍ら作歌作曲及び歌集の編纂等に從事した。其の作つた歌は、六百首を超え、又彼が發行した歌集は、五十三卷の多きに達した。しかもそれが其の時代の一流の歌集

として貴まれ、後の歌集編纂者は、大抵皆之を模範としたのを見ても、その歌集に如何程實用的の價値があつたかゝ知れよう。彼が最後に公けにした一集は、一八六〇年頃の出版で、彼は既に年老いしため、其の子で、當時ユニオン神學校の校長であつた神學博士 Thomas S. Hasting[3] の補助を得て出版した。此の歌集は Church Melodies といふ名で、此の時初めて、同一頁に歌と曲とを共に印刷して見易からしめた。これは勿論禮拜者に、使用上非常な便宜を與へたので、それより後歌集は大抵此の印刷法を襲ふ樣になつた。

世人の讃美歌に對する興味を增し進ませるに、ヘスチングスの努力が非常に有効であつたのは、彼が第一流の作歌者又は作曲者でなかつたにも拘はらず、其の筆に成つた歌、特にその曲が、米國の彼以外の作者のに比べて、最も多く今日迄一般に用ゐられてゐるといふ事實を見ても知れる。實際大讃美歌といひ、大樂曲と稱すべきものは、彼以外の作者の筆に成つてゐるが、一人にて歌を作

り、之に最も適當な曲をも附けて世に與へた人は、恐らく音樂史上で彼に比ぶべき人がないであらう。

米國で音樂が發達した歷史を知つてゐる人々は、ヘスチングスといふ名と同時に、二つの人名を思ひ出すであらう。即ち Lowell Mason と William B. Bradbury（第九、第十一、第十六各篇參照）とである。此の二人は作歌者でなく、作曲し、編纂し、唱歌を敎授したのであつた。博士ヘスチングスは、メイスンたちがなした事をなし得たのみか、更に進んで能く禮拜の精神を盛んならしめた。彼の作歌の特色は、宣敎的の性質を帶びてゐることで『あなうるはし シオンのあさ』の歌を見ても、宣敎的精神を鼓吹する點が、監督ヒーバーの『くしき星よやみの夜に ひかりをいよゝはなち』（さんびか第一編七二、選歌集八二）と、能く似てゐるのみならず、律も同じく、曲もまた同じメイスン作のを用ゐえらるゝこと、『さんびか』に收めてある通りである。

併しヘスチングスの作つた曲の中で、一番名高く、又これあるが故に彼の名が永遠に遺るといふ程の曲は、『ちとせのいはよ』(Rock of Ages)(本書第十二篇參照)を歌ふに用ゐる Toplady である。此の曲は一八三〇年頃から、彼が公生涯の初期迄の間に作つたものである。

併し日本で普通歌つてゐる彼の作曲は、一八三七年の作 Ortonville で『さんびか』第一編頌歌四六二と九六の曲と同時に世に出たものである。又『さんびか』第一編二四五の Retreat, 同じく二七七の Arcadia も、弘く知られてゐる曲ではあるが、信者に愛誦される點は前のに如かぬ。

作曲するには、誰でも大抵先づ自分のなり、或は他人の作なりの歌を見、其の歌の意味や句調で、感動されてから筆をくだすものであるが、博士ヘスチングスの習慣は反對で、先づ譜を作り、之を紙面に寫し取り、幾度か朗詠し、或は彈奏してゐるうち、其の曲に適する句が自ら心中に浮び出づるを俟つて、詞を

筆に記すのであつた。彼がその得意なる傳道用又は修養用の讃義歌の詞をも曲をも作らんとする時には、特に神の指導を仰ぐを常として居つた。教會歴史中で、傳道事業も緒に就き、成功の見込もたつて『あなうるはし シオンのあさ』と歌ひ出でし一時期を、傳道事業に大なる成効を得た現時に比べてみるも、興味あることである。一八三〇年の頃、既に宣教事業の成効すべき見込があつて、かゝる傳道的の讃美歌を作つたとすれば、今日明に傳道の成功を得て居る時には、なほ更に神の教會で此の歌を歌ふべきであらう。

尚一首『さんびか』の中の歌がヘスチングス博士の作といはれてをる。即ち第一編三三六の『たふときわが主よ かゝるわかれも』(Jesus, while our hearts are bleeding)で一八三四年の作である。それから『選歌集』にはなほ一首"He that goeth forth with weeping"といふ畧同時代一八三六年のがある。これは全部彼の作ながら、同集一七二の"Come ye disconsolate"(邦譯さびんゃ第一編三二六)は、第三節

だけが彼の筆、一、二の兩節は、かつて名聲盛んなりしアイルランドの詩人トーマス、ムーアの作である。

なほこの三三六の譜は、Isaac Baker Woodbury, 三二六の譜は、サムエル・ウエッブ（第五篇參照）の作である。

第四十三

『あしたのひかり　やゝあらはれ』"The morning light is breaking"

（さんびか第壹編一五二・古今二〇一・選歌集一五三）

『主いまさねく　とくこよ』"To-day the Savior calls"

（さんびか第壹編一九三・古今二七〇・選歌集一六八）

"My Country, 'tis of thee"（我は歌ふ自由のさと）といふ句を初行としてゐる英詩がある。此の詩は一九〇八年、米國で Theodore Roosevelt 氏が未だ大統領の職に在つた頃、同國の艦隊が我が日本を訪問に來た時、歌うたので、日本には縁故あり興味ある詩である。米國艦隊の乘組士官や水兵が、沿岸の各地へ上陸した時、生徒や學生等が或は停車場に或は市内の公園に、遠來の客を歡迎して、少年生徒がこの米國の國歌を歌ひ、歡待の誠意をあらはした。本來國歌た

るの性質を完全に備へ、到る所で國歌なりと認られてゐる讃美歌は、澤山ないものであるが "My Country, 'tis of thee" は、先づ米國の國歌と稱せらるゝに近い歌である。勿論英國の國歌 "God save the King" の旋律と衝突せぬでもないが、是は英米の兩國間に存する關係に鑑み、又その英國調でも米國調でもなく、恐らく獨逸調なるべき事實に照らして、看過せねばなるまい。この歌は前のをりに東京キリスト教青年會の依頼をうけて、別所梅之助氏が原文のまゝの調に譯した。そして青年會の出版物の他に、ある繪葉書屋が、もとの譜と譯歌とを繪葉書にして賣り出した。さる歌の事とて讃美歌にはのらぬ。此の作者の筆に成つた各國及び全教會に關する歌が、ほかにある。即ち、此の物語の首にしるした『あしたのひかり　やゝあらはれ』である。今此の歌をかりて、作者が文學史及び宗教史の上に占むる地位を、こゝに說かんとするのである。

Rev. Samuel Francis Smith, D. D. は、浸禮教會の牧師であつた。彼は前世紀

の初め（一八〇八年　ボストンに生れ、長じて Harvard 大學を卒業した。其の同級生の中には、詩人で又滑稽家として名高い Oliver Wendel Holmes があつた。それから彼は會衆派の設立した Andover の神學校に學んだ。"My Country, 'tis of thee" を作つたのは、此の神學校在學中の事であつた。Lowell Mason（本書第三、第八兩篇參照）は、此の頃既に宗教家、教育家の間に名を知られ、特に新英州で、此の種の人々の間には有名な人となつて居た。彼はボストン日曜學校の生徒に讃美歌を教へ、同市中の諸教會の讃美歌隊の補充としようとの考で、頻に盡力中であつた。併しこの生徒に歌はせるに適した歌が少いので、獨逸公立學校の當局者間に評判の善かつた唱歌集を取集め、自由に其の內から選擇することにしたのであつた。メイスン自らは獨逸語に通じてゐないので、作詩家として聞えてゐたスミスの許に行き、上記の獨逸唱歌集から、自分の目的に適した唱歌又は讃美歌を擇び、之を英詩に飜譯し、もし又適當なら律を同うする英詩を作

るやうに依頼した。此の依頼は青年神學生にとつて快心の事であつたので、彼は獨逸讃美歌を數篇飜譯した。此の飜譯は後年博士メイスンの發行した歌集中に收められた。併し "My Country, 'tis of thee" は、飜譯したのではなく、全くスミスがこの獨逸書中に見出した譜に合せて作歌したのである。尤も、此の譜が既に英國で愛國の歌に用ゐられて居る事を、その時彼は知らなかつた。とにかく、この譜と結んだ彼の歌は、不朽の傑作として、米國民一般の愛好するところとなり、しかも少しの修正も受けず、全く一八三二年二月の某日、一片の紙に書きおろされた儘の形で歌はれてゐるのである。同年七月四日即ち米國獨立祭の日に、ボストンの一教會で兒童を主とする賀會の席上でこの歌を歌つた。其の後間もなく、公立の諸學校も此の歌を採用し、博士メイスンの公立學校唱歌集中に收められるゝに到つた。これ此の歌が今日の如く廣く米國に行はるゝ起りである。米國で出版された殆んど凡ての讃美歌集が、此の歌を收めてをるの

を見れば、此の歌に宗教的並に愛國的の價値あることは確實である。

スミス博士の名譽の主としてこの "My Country, 'tis of thee" に基くのは、疑ひないが、彼が一生涯の活動は、決して詩歌の範圍のみに限られなかつた。彼は多年浸禮派の牧師をつとめ、一時大學教授を兼ねたこともあつた。即ちメイン州で、現時 Colby University といふ名の大學で、近代語の講座を擔任した。彼は十五ヶ國の語に通じてゐたが、未だこれで滿足せず、齡八十六に達し、生涯の終りに近いた時ですら、新たにロシヤ語の研究を始めようとして、適當の教科書を詮索して居たといふ事が、ボストン市外の住居に彼を訪問した人によつて傳へられてゐる。

併しこの技倆ある人が、どの位社會のために盡したかを十分に記す事には、彼が外國傳道に非常なる興味を有つた事と、傳道用の書物の編輯者となり、傳道會社の書記となつて努力した事をも附記せねばならぬ。彼は外國傳道

會社の書記を勤めた關係で、傳道地を二度巡廻した。"My Country, 'tis of thee" といふ歌を學生時代に作り得た程の人であつたから、傳道地を視察して、心に感じたことを傳道の歌で言ひ現はしたのは、當然であつた。併し『あしたのひかり　やゝあらはれ』といふ歌も、實は彼が未だ學生々活をして居た頃、即ち一八三二年の作であつた。然るに此の歌は、弘く世に行はれて、彼が傳道地を巡廻した頃には、既に諸國の語に飜譯され、以太利、スペイン、ポルトガル、其の他の歐羅巴及び南アメリカの國民に歌はれたことは言ふ迄もなく、遠くビルマ人、テルグ人、シヤム人、カレーン人、支那人等にも歌はれたが、獨り日本譯のみが、著者の生前に成らなかつたのは殘念な事であつた。スミス博士の此の歌を評して『樂天的の心地よき歌』といふのは適評である。此の樂天的の性質ある故に、此の歌はヒーバー博士の『北のはてなる　こほりのやま』（第十一篇參照）に比して、一段と愛吟されてゐる。キリストを信ずるもの遂に世に勝

つといふ、樂しき約束を語るものは、此の歌である。

スミス博士は、讃歌美集の編纂にも關係した。一八四三年に世に出たThe Psalmist といふ書に、彼は自作の歌を載せ、又歌の排列を擔當した。此の書は、當時米國浸禮教會内で最も信用あり有力なる歌集であつた。

併し斷えず活動し世を益した此の人の生涯が、突然終を告ぐる事となつた。彼が一國語の研究を始めようとしてゐた事を見、又其の臨終當時の事情を見ても、彼の能力は少しも衰へなかつた事が知れる。一八九五年十一月のある土曜日の夕、兼て約束して置いた日曜の朝の説教の義務を果さんとて、將に汽車に乘らうとした時、何等肉體上の豫報なく、突然後方に倒れたまゝ、また起つことが出來なくなつた。

『あしたのひかり　やゝあらはれ』を歌ふ譜は、『さんびか』のも『古今』のも同一である。此の歌は『共通』の歌の一で、Webb と呼ぶ曲は、本書第十一篇で既

に述べた如く『たてよいざたて　主のつはもの』の譜と同じである。此の譜はもと俗曲より移したものながら、英國でも、米國同樣に人の好む曲である。

博士スミスの名と共に、連想さるゝ歌が他に一つある。即ち『主いままねく　とくこよ』である。此の歌は本書第四十二篇に略傳を載せたThomas Hastings博士が改訂し、原著者の承認を得て、其の新著『靈性の歌』(Spiritual Songs)に收めしより、世の貴ぶ所となり、彼の紹介と保證とによりて、今日迄重要なる一地位を保つて來た。そして今日以後も、其の地位を失ふまい。此の歌のために選ばれた『今日』(To-day)といふ譜は、Lowell Masonの手に成つたものゝ一である。

第四十四

『このようにうまれ　よのうきことを』

"When our heads are bowed with woe"

(さんびか第壹編三六五・古今一五七・讃歌集三〇四)

この歌は既に記した監督レジナルド、ヒーバア(第十一篇參照)の遺稿の歌集を出版するをりに、英國教會のデーン、ミルマンが書中に挿まんとしてよみいでた十三首の歌の一である。監督ヒーバーが、國教會に屬する人々の單に詩篇をのみ唱ふを見て、新に讃美歌集の編成を思ひ立つたのは、今から百年前の事で、英國でも讃美歌作者の數寥々たるものであつた。併しヒーバーはこの少數なる作者の内より、二名の補助者を得た。即ち其の一人はミルマンで、一人は本書第二十五篇に記したウォルズウォースである。元來英國教會には、年中行事

書とも稱すべきものがあつて、一ケ年中順次守るべき儀式、慣例を記載してある。そして右の儀式慣例を執行する時に歌ふ讃美歌を編纂せんとしたのであつた。ミルマンの歌は、年中行事でいふ三一の日曜日と稱するものゝ後第十六回目の日曜日に歌ふべき筈であつた。さて同教會の祈禱書に其の日の爲めに定めてある聖書の章句は、路加傳七章十一節以下に記せるナインの寡婦の子が、死より蘇生された記事である。此の歌は、主が始めて、悲しめるナインの母に遇ひ給うた時の光景、及び人間が其の一生涯に實驗する、悲むべき境遇に關聯して居る。作者は其の子女の三人を一つ墳墓に埋葬した苦き經驗が有つたのだから、その葬式のをりの深き感動によりて、此の歌が出來たのかも知れぬ。なにせよ飜譯はいはず、英語の原文において、人間の悲みに神が同情し給ふといふ思想を歌つたもので、此の歌に並ぶのはなからうと思はれる。神學博士 Henry Hart Milman は、ジョルジ王の時代に名高かつた一侍醫の子で、一七九一年ロ

ンドンに生れた。始めイートン校に入學し、後オックスフォード大學に學んだが、其の當時の標準に照らして見ても、學生として實に光輝ある經歷をそなへ、脚本を著し、或は詩歌文學等の著述によつて、識者の間に其の名を知らるるに至り、遂に一八二一年同大學の詩學教授となり、在職十年の後ジョン・キーブル（第五篇參照）を後繼者となして其の職を去つた。彼の作歌は、皆一八二三年以前のものである。これ此の年ヒーバー監督が、印度に赴任することゝなり、從來讃美歌の爲に盡した活動を中止するやうになつたからである。彼は一八二七年、オックスフォード大學にて、Bampton 奬學金の講演者にあげられた。これは彼が一生涯に回轉期を劃することゝなつた。即ち彼は此の時から、神學の研究に心をよせ、其の後は詩歌を棄て、全力を神學の研鑽に熱中するに至つたのである。彼は一八二九年に其の著『猶太人の歴史』を出版した。此書を讀めば聖書に關する問題を例の獨逸に於ける基督教思想の指導者が、批評

的にとり扱うたと同樣に、彼も批評的に解說するの傾向を有した事がわかる。併し大體から評すると、彼の結論は寧ろ建設的、保守的であつたが、其の研究の方法が、理性を尊び、批評的であつたので、當時正統派の人々は、大に之を憂ひて激烈に反對し、一般世人も彼を非難し、オックスフォード大學の講壇より發表した彼の意見も、亦非難さるゝに至つた。デーン Stanley は、寛宏なる意見を有した進步主義の人であつたが、ミルマンの說を評し『是れ獨逸神學が、始めて英國に輸入された明かなる證據で、聖書も他の書籍と同一方法で、研究すべきものであること、聖書中の歷史に現れたる人物事件も、尊敬の念を以てすると共に、また批評的に取扱はるべきことを示すものである』と、いうてをる。ミルマンはその學說の結果として、多少の困難に出遇うたが、幸ひに敎職懲戒條令に照らされて、處分さるゝ如きことはなかつた。是は全く時代思想が、次第に寬容になつたからである。彼は一八一六年に按手禮を受けたが、其

の後何等宗敎上重要な地位を得ず、一八三五年始めて、Westminster の Canon の一員となり、其の後一八四九年セント、パウル寺院のデーンとなつた。

彼は今述べた外にも敎會歷史に貢獻した。『ラテン基督敎の歷史』といふ一書も、亦彼の筆に成つたもので、內容の豐富と、當時の人心に大感化を與へた事と、文藻の雅なるの故に永存すべき價値ある著作である。斯くて彼は十九世紀における歷史家として、學界に優れたる地位を占めた。ミルマンは啻だ作歌者たるのみならず、又歌集の編纂者であつた。其の編纂に係る "Selected Psalms and Hymns" は一八三七年に出版した歌集である。彼の筆に成つた十三首の讃美歌は、今日迄皆愛誦されてゐるが、此內僅に一首が、日本語に譯されて『さんびか』及び『古今』に收められてゐる。著者の名が、歌人として世に記憶さるゝは、此等の讃美歌があるからである。此の事實によつても讃美歌が他の文學的著作に比べて、一層永存的の價値あることがわかる。彼の著作なる宗敎的

聖書的の脚本の如何なる種類の物なるかは『エルサレムの滅亡』『アンテオケの殉教者』『ベルシャザー』等の表題を見ても知られる。此等の脚本が始めて世に出た時、英國の社會は大にミルマンを歡迎したが、後久からずして、其の名聲漸く傾き遂に絶版となつた。然るに彼の作歌及び散文の著作は、今尚ほ存在してゐる。ミルマンに就いてなほ一つ興味ある事實がある。即ち彼が自己の作歌集を出版し、之を其の妻に獻ぐる語の中『人生の詩を現實となさしめし我が妻に献ず、その愛する夫より』といふ句を用ゐた。此の句はたま〳〵以て英國文士の家庭に於て、夫婦間に存する幸福と、其の幸福の承認とを語る者である。

ミルマンは英國教會の人としてジョン・エラートン（第三十三篇參照）と同じく、英國教會の高派運動に對しては、超然として何等の關係をも有せず、從つていはゆる小冊子派の爭論にも與からなかつた。自由派の一人として著名になれる彼が、此の爭論に關與しなかつたとは、頗る不思議に思はれるが、實際自ら公

言せし如く、彼は其の研究の方法に於てこそ、自由派に屬してをれ、其の到達せし結論に於ては、決して自由主義の人とは云へなかつたのである。彼曾て豫言して、レナンやストラウスなどが、如何に基督教を非難攻擊しても、基督教は何等の痛痒を感ぜずして、其の存在を完うするであらうと言つた。事實は彼の豫言の如くであつた。又一時は、其の名を聞くだに、基督教徒を戰慄せしめた程の勢であつたチュービンゲン派を目して『徒らに他を批評するのみで、其の學派自らは他よりの批評に耐ふる力がない』と冷評したが、今日はチュービンゲンなる語を口にする人すらなきに立到つてをる。

ミルマンは、一八六八年天に召され、十九年間自らデーンの職に在りし大寺院の墓に葬られた。彼は幼い時セントポール大寺院にて執行された、ネルソン提督の葬儀を目擊し、後年ウォータールーの英雄ウェリントン公の葬儀が、此大寺院に執行された時には、自らデーンたるの職責上より、之に參與した。

『此のようにうまれ　よのうきことを』の原文には、節のをはりのをりかへしとして、『あゝマリアの御子よ　きゝたまへ』といふ句がある。新教の立場より見ても、此の句は別に有害のものとも覺えぬ。マリア禮拜の臭味ある句ではない。然るに人をマリア禮拜に誘ふの恐れありとの理由で、曾て此一句を訂正せんとの議案が、某讃美歌委員の前に提出された。當時委員中の一人は、非常に怒つて『教會の會衆が、生れながらの無智文盲者ならば』いざ知らず、然らざる限は、此の一句の爲にマリアを禮拜するに至るが如き事は斷じてなしと主張し、遂に訂正の議案も撤回された。

此の歌を歌ふには、いつでも Richard Redhead の作曲を用ゐるので、『共通』讃美歌委員もそれをとり用ゐた。レッドヘッドは、此の外にも稍類似の曲を作つた。即ち Gethemane であつて、Watts の作歌『さかえのきみの　十字架をみれば』（第十二篇參照）を歌ふに用ゐらるゝ曲である。

第四十五

『あまつみかてに　こゝろつよめて』"Oft in danger, oft in woe"
（さんびか第壹編二七一・讃歌集二八八）

『みそらにきらめく　千よろづの星は』
"When marshalled on the nightly plain"
（さんびか第壹編六八）

『御神はちからの　きみにませば』
"The Lord our God is clothed with might"
（さんびか第壹編四〇）

青年も老成人と相駢んで、人生活動の他の方面に於ける如く、讃美歌界に於ても、よく殊功を樹てることがある。

青年にして、今日迄讃美歌界に樹てた殊動の記錄は、Henry Kirke White と

いふ名と關聯してゐる。當時此の名は、非常に著しいものであつた。一八〇六年此の名の所有者が、永眠した時、英米兩國の全文學者等は、深厚なる同情の涙を濺いだ。前途に大なる望を囑されてゐた青年が、一生涯の活動を始むるや否や、忽ち終焉を告げたので、到る處これを惜まぬものはなかつたのである。

讃美歌作者必ずしも詩人であるといふ斷定は出來ない。若し基督教の眞理と宗教的情熱とを巧に混化して、韻律といふ模型に入るゝことが出來たなら、餘程貴い事業である。併も詩的熱誠といふ、生々とした靈覺を之に加へることが出來るなら、測り難き貴さが更に生ずるのである。此の青年作者が、當時の賞讃と愛情とを博したのは、これに外ならぬ。

彼の父は、Nottingham の肉屋であつた。記錄の徵すべきものはないが、父は品位あり、材能のあつた人であつたかとも思はれる。何せよ母は女學校を主監して成功したといふから、卓越した婦人であつたに相違ない。此の女學校の內

で、しかも一教師の監督を受けながら、此の子の教育が始められたのであつた。彼が僅かに十三歳の時 "To an early primrose" と題した一詩を作つた。これを見ても、彼には、詩的才能があつたことが知れる。併し此の才能を有しながら、彼は、一年後メリヤスの靴下を織る一商人のもとに、丁稚とならざるを得なかつた。此の奉公が、彼の嗜味に適せぬことは容易に理解し得られよう。然るに彼は、この無趣味の境遇に在つても、其の天才を壓服さるゝことなく、十五歳の時ノッチンガム文學會の席上『天才』といふ題を以て、講演する好機會を得、二時間四十五分に亘る講演を『立派に』演じ去つたと評されてゐる。此の講演に成功したため、彼はメリヤス織機械の上から一躍して、さる辯護士の事務員となつた。爰に始めて職工生活を脫して、將來高尙な業務に就く見込が立たのであつた。そこにあつて、彼は豫期の如く、斷片的の時間を勉學に用ゐ、或る程度までは、文學をも研究した。それは、當時彼が屢々定期刊行の文

學雜誌に寄書し、又彼が十八歳の時一卷の詩集を發行してゐるのを見ても推しはかられる。

彼に一人の親しい友人があつた。此の人は、悔改の實驗を有つた人であつた。その感化によつて、彼は宗教上の懷疑に傾くを免かれ、却つて容易に信念を抱く樣になつた。

若しホワイトの思想が、友人のと同一の方向を取らなかつたならば、二人の親しい交りも、或は絶えたかも知れなかつたが、幸に彼も心靈的に發達して、友人と同一徑路を歩むことゝなつた。彼は其の心靈上の實驗を前に掲げた第二の歌『みそらにきらめく』で、言ひ現はさうとしたのであらう。

兎に角此の歌は、彼が一生涯中特殊の時期に作られたものである。原作の一節にある『あらしをのこして』(Once on a raging sea I rode) といふ句は、此の時代の心的狀態を示したものである。この如く心の變化した結果、彼は基督

教の教師とならんと決心し、此の希望を告げて、法律事務所との契約を履行することを免ぜられ、友人等（友人等のうちには、印度に傳道して名を轟かしたHenry Martyn もあつた）の援助により、ケンブリッヂ大學に入學し、奬學金を得た。彼は研究を始めるや否や、直ちに其の材能を示した。此の時既に將來同大學の與ふる最高の名譽は、彼の掌の裡に來らんとするかの如く見えた。

然るに不幸にも、彼は大學の課程を終ることが出來なかつた。入學以來僅に一年餘にして、過度の勉強のため、病を肺に得、病勢忽ち進み、一八〇六年遂にまた起つこと能はぬに至つた。彼は一七八五年に生れ、年僅に二十二歳にして永き眠についた。Byron と Southey との兩詩人が、輓歌を作つて、其の死を悼み、彼の名聲は、これによつて外國にまで傳はつた。

『あまつみかてに　こゝろつよめて』の歌は、一紙片の裏面にかきつけた十行より成る斷片的の詩で、其の紙片の表面には、數學の圖式が記してあつた。

そして表裏とも同じ筆蹟であつた。

此の斷片的の詩が、讃美歌編纂者なる Rev. W. B. Collyer の手に落ちた。編者は原作の十行を十六行に增補し、これを四節に分けて、當時準備中であつて、一八一二年に發行した歌集の中に收めた。この增補されたものは、後更に訂正された。しかもその訂正は、年僅に十四の一少女の手で、一層增補するの目的で試みられたのであつた。のち此の少女の母なる Mrs. Bethia Fuller-Maitland なる婦人が、一八二七年に修養用の一書を發行し、此の書中に、己が娘の作を收めた。

其のち更に監督ビッカースッテス（第三十四篇參照）が、一八三三年に幾分の訂正をなし W. J. Hall が、一八三六年に再びこれを訂正して、"The Mitre Hymn-book" と呼ぶ歌集中に收めた。此の訂正では、本歌の第一行は、此の編に掲げたのと同一である。コーリャーの發行したのでは、原作のはじめが、"Much in

danger, oft in woe, onward christians, onward go" となつてをる。此の歌には、戰鬪的の資質あるが故に、基督教徒生活の進軍歌と稱せられる。併し此の歌は、極めて聖書的で、パウロの語調を帶び、エペソ書六章十節以下十八節の句を明かに反照してゐる。此の歌が基督教徒の精神志氣を奮ひ起させた事は、Baring Gouldsの『みよや十字の　旗たかし』（第七篇參照）に勝るやも知れぬ。勿論後者は、前者に比して餘程後の世の作で、世人を益して來た時日もまだ短い。

ヘンリイ・カーク・ホワイトの歌で、讃美歌中に收めてある第三番目のは『みかみはちからの　きみにませば』といふ句で始まつてゐる。此の歌は『聖められた想像』の充實した一大詩で、靈感をうけた文學の一雄篇として、價値ある所以も、此の點に存する。作者が永眠した年、即ち一八〇六年の作である。

University 或は作者自らは University College と稱してゐるのが『あまつみかてに　こゝろつよめて』に普通用ゐらるゝ曲である。博士 H. J. Gauntlett

の筆になつたものである。（第二十九篇參照）

『みそらにきらめく　ちよろづの星は』の曲 Ayrshire は、人口に膾炙してゐるスコットランドの Bonnie Doon（めでたきたまもの）であつて、實に大那翁がセント、ヘレナ島に流竄せられて、自然排英的の感情に驅られてゐる時にすら、これこそ英國が產出した唯一のメロデーで、これ以外の曲は皆厭ふべきものと評した事があつた。

此のメロデーの作者と、其の年代とは確實でない。Robert Burns は之を "The Caledonian Hunit's Delight" と稱し、蘇國人なる James Miller の作であると言うてをる。併しバーンスも、此の曲には作者たるの權利を要求するものが、他にもあることを認めてゐる。其の一は、此の曲がアイルランドの國風なりといふのである。尙ほ一は The Isle of Man といふ地から出たものだと、主張するのである。

前記三首の最後の歌の曲なる Ellacombe は獨逸曲で、古く一七八四年に作られ、同年 Wurtemburg で發行された天主公教歌集中から出たのである。

『さんびか』では此の曲を一八五一年 St. Gall Gesangbuch の中に收めたものとしてゐるが、事實は前述の通りである。そして前に述べた方を眞實とせねばならぬ。

第四十六・四十七

『ひかりにあゆめよ　さらばふかき』
"Walk in the light: so shalt thou know"
（さんびか第壹編二五二・選歌集二五四）

『神のみことばよ　きよきふみよ』"Lamp of our feet, whereby we trace"
（さんびか第壹編一二四）

『よろづのものは　主ぞたまふ』"Thine are all the gifts, O Lord"
（さんびか第壹編一四八・古今一七九・選歌集一四八）

『みそらのかなたに　うみのそこに』
"We may not climb the heavenly steeps"
（さんびか第貳編一四四・選歌集二〇四）

John G. Whittier（一八〇七—九二）は、過去半世紀間『クエーカーの詩人』と米國に呼ばれし人で、同じ名稱を英國にて贏ちえたるは、Bernard Barton（一七八

四—一八四九）である。二人の中ホイチアの名はバアトンより偉大であり、第一流の詩人中に伍して居る。されど兩者とも然るべき幾多の英語讃美歌に貢獻せし人として、廣く認めらるゝに於ては變らない。クエーカー（友會）では、定まつた公けの禮拜に、讃美歌を用ゐないのを、久しい間の習慣として來たので見ると、これは面白い對照である。實にクエーカー教徒が讃美歌を歌ふに至つたのは、僅か六十年程前の事で、重に日曜學校事業の補充の爲めの、傳道會合といふのから始まつたのである。都合よく日曜學校に集まる樣になつた人々に、クエーカーのには限らないが、定つた公會禮拜にも出る事を勸めたけれども、餘り効果がなかつたので、英國の諸市に傳道所を設けて、その特色の一つとして歌をいれた。元よりこれはクエーカーの人々が、神に對つて人心の調べを奏する、更に廣くして一般的な歌の用法に達する、ほんの第一歩に過ぎなかつた。かくて追々に、まづおしなべて、クエーカーのどの禮拜にも、許して然るべき

精神の表式と見らるゝやうになつた。クエーカーの一學校に長たるJohn Fordといふ人が、クエーカー集團（彼等はSociety of Friends『友會』と呼ばるゝを好む）の代表者達が、選んで提供した讃美歌を本として、一八五五年に一讃美歌集を編纂した。これを得て禮拜の時に歌を用ゐる事が、ひとしほ行はれていつた。編纂したのは歌はせるのでなく、幼年に讃美歌を諳じさせようといふにあつて、序文にもかく明記してあつた。併し一九〇三年には、更に別の一卷が現はれて、入選の歌の數も、前の百三十八篇に比して、約四百篇に上り、且其の歌に用ゐるにふさはしい譜の目錄さへ添へてあるのから見ても、もう其の頃には、制限の時期が去つたのだといふ事を、判然と示して居る。

バアナアド・バアトンは、一八七四年倫敦に生れ、友會の學校に學んだ。後八年乃至十年は商業に關はり、更に二三年は家庭教師となり、つひに或る銀行に地位をえ、後の四十年間それを守つて、一八四九年にこの世を去つた、銀行

の書記といふ仕事が、彼の趣味にしつくりあつたものでない事は、今の世に傳はつて來た彼の友人の書簡で明かである。銀行を止めて、文士生活に這入らうかと思ふがどうだらうと、詩人Lambに相談を掛けた。その返書に、ラムは『何？本屋の塲あたりの仕事丈で、外にこれといふ道理にかなつた生計の途をたてずに、世間にぶつからうといふのか、君は！それよりは、*Tarpeiaの絶壁から眞倒様に、さきの尖つた鐵の杙を目がけて、とんだがよからうではないか』と、斷然とした面白い意見を述べて居る。とに角バアトンは、此の沒趣味な職業を安泰な避難所として、多く書いた。彼の詩作全體から、約二十篇は、讃美歌として用ゐらるゝ樣になつた。著者は神學の方からいへば、ユニテリアン風な信仰を好んでゐたので、特に其の派の方に用ゐられた。さりながら米國の、彼の片割といはれたホイチアと同じく、公敎的精神に富んで居て、最も福音主義の人々に―蘇國人の間でさへ―嘆美された。『さんびか』にあつて彼の

筆になつた二つの歌―上にあげてある―は、人の能く知るもので、最も廣く用ゐられて居る。それは聖書の價値と力とをいかに認むべきかを示すと共に、人生の誠實を追ふべきを懇切に說いて居る。『神のみことばよ』の歌は、一八三六年作者の "The Reliquary" と題する卷に出で、もう一方は十年前に彼の "Devotional Verses founded on Select Texts of Scripture" (聖書の名句に由りたる聖歌) といふのに現はれた。

『神のみことばよ』(さんびか第一編一二四)の歌の譜なる Heber と Elizabethtown との作曲者 George Kingsley (一八一一―八四) は、米人で Massachusetts 州に生れ、ボストン、紐育、フィラデルフィアなど諸方に移り住み、そのいづれにても、敎會のオルガン彈奏者を勤め、音樂敎師を職として居た。世人の能く知る Girard College といふフィラデルフィアの孤兒院にても、其の市立學校にても、音樂を敎へた。彼の作曲の筆は達者であつた。その編纂した青年用の音樂書は、八卷

に上り、敎會の聖詩歌唱の本も數部あつた。さて此の二つの譜は、何れも一八三八年の作であるが、なほ同年の作譜 Ware (さんびか第一編四五) と、一時大そうはやつた、調子の綺麗な、Mühlenberg の『風吹きすさみ　雨降りて』(I would not live alway) (さんびか第一編三三一) の譜 Frederick とがある。これは一八三三年になり、その當時今よりも敎會音樂として盛んであつた獨唱に用ゐる積りで、作曲された。會衆の音樂を、唱歌隊の歌や獨唱のと區別するのが、現今西洋の敎會禮拜の特徵であるが、七十五年乃至八十年前は、諸所でなほさうであつた。

キングスレーはロウエル・メイスン、トマス・ヘースチングス、ウィリアム・ビー・ブラドベリー (第三、十六、四十二、各篇參照) に比すれば、二流といはねばならないが、米國の敎會音樂に侮るべからざる位置を占めて居る。

『ひかりにあゆめよ　さらばふかき』の譜の Warwick は、Samuel Stanley (一七六七―一八二二) の作である。スタンレーは Ebenezer といふ昔の倫敦禮拜堂

の式を賑はした、二十四の曲譜を作つたが、これはその中の一つで、一七九六年に現はれた。彼は又晩年三十四年間、此の禮拜堂の歌の指揮者を勤めて、其の成功著しく、ために該禮拜堂は、遠近に其の名を知らるゝに至つた。其の以前も Carr's Lane といふ、これまたロンドンにある會衆派の禮拜堂にて、歌の指揮者をつとめた。彼は獨唱家たると共に器樂家で、セロの名手であつた。教會の音樂以外に、音樂會に出ても、さかるべき技を示し、前世紀の初年の、英國の大音樂祭にも名手として出演した。

ジョン・グリーンリーフ・ホイチアの經歷は、バアトンよりも目覺ましかつた。彼は一世紀以前の嚴正なる清教的感化の果實であつた。少年のころ、家貧しく、ニュー、イングランドの田畑をその背景に持つてゐたといふ丈で、中學校教育をうける機會に接したのは、ひとへに、當時の新聞記者であつた有名な William Lloyd Garrison に、そのそゞろがきの詩の才を認められて、切に勸めら

れたのに依るのである。田畑より中學校に走つたといふ事は、ほんの端緒で、爾後身を支ふるため奮鬪の必要に迫られ、日に數時間靴つくりをした。さりながら、貧しきもの虐げらるゝ者に對して、國民として廣き心をいだく男子を出だしたるを思へば、これも尊き經驗といはねばならない。彼は早くより黑人に同情し、熱心な奴隷賣買非認者となり、一八六〇年より六五年に至る南北戰爭を勃發せしめたる意見の軋轢の、主なる原動力となつて、遂に合衆國諸州を通じて、黑奴解放の實を擧げしめた。新聞記者に、國會議員に、奴隷解放會の書記にと、其の位置は轉じても、終始一貫其の筆をとつて、惡に刄向ふ詩人であつた。今や彼は抒情詩人として、わけても宗教的詩人として、米國が生んだ最大詩人となつた。彼に詩の道を辿らしめたのが、宗教的といひがたきロバアト・バアンスであつた事は、頗る奇とすべきである。彼に接するものは、彼の性格の堅實さの光に浴する思ひをいだく。同時代の詩人にして『さんびか』第

一編三三八の作者 Phoebe Cary は、彼を評してかういつた。

勇氣にみちた汝の詩も
又なく聖い讃美歌も、
それ自らが愛の曲である
汝の一生の、律呂ある美しさには及ばない。

（茲に詩とあるは彼の愛國的、博愛的の詩をさす）

さういつた讃美歌は、ホイチアーの筆の穂先から湧かなかつた。讃美歌として用ゐられて來た彼の詩は、宗教詩――教會とか何々館とか〻建つたといふ樣な時に書いたもの――又時に苦しむもの虐げらるゝ者をいたはる心から書いたものの――の一部をとり、或は補綴したに過ぎない。然し其等の歌には多く、基督教徒の極めて物柔かな感がみちてゐる爲に、作者が一生を通じて、ユニテリアンの見地からキリストの本性を見る『クエーカー』の一分派に屬して居たにか

かはらず、幾度となく讃美歌にされたり、キリスト教の諸宗派の讃美歌集に入れられたりした。

ホイチアの讃美歌詩の中で、最も勝れたのは、"Our Master"（我らの主）と題して、キリストの愛を歌つたものであらう。詩は三十九節より成り、『さんびか』第二編一四四の『みそらのあなたに』(We may not climb the heavenly steeps) の原詩は、此の中から得たのである。それは一八五六年（さんびかの頭註に六六年とあるは誤）、それの載つた集の始めて世に出た時の作である

『よろづのものは　主ぞたまふ』といふ『共通』の歌は、一八七八年ボストンの小兒傳道會の記念日のために、書いたものである。

原詩からとつた歌で、『さんびか』にないのがもう一つある。それは選歌集だけにある "Dear Lord and Father of Mankind"（世人の慕ふ主よ父よ云々）の歌で、一八七二年の作、原詩は "The Brewing of Soma" といふのである。

詩美と、温味と、人類を思ふ心の深さとに富める此等の讃美歌を物した詩人自らは、音樂の事は知らないのだからといつて、讃美歌作者を以て任じはしなかつた。然し『よい讃美歌は、詩を最もよく用ゐたものだ』とは信じてゐた。かれのミューズの奇しき源より溢れいで、今なほ、いやまし流れ出づる福祉を見ては、彼たるもの、いかで果てしない滿足と喜悅とを感ぜずにゐられやう。

William Vincent Wallace（一八一四—六五）は、Serenity の譜、即ち此の譜のもとになつたピアノの樂譜の作曲者で、愛蘭土のヴァイオリニストにして、東に、西に、南に、樂器を奏でながら世界を遍歴し、時にオペラや其の他の多樣なる音樂の作曲、殊にピアノの譜を作つた。一度は米國でピアノ製造業を試みたが果さなかつた。ホイチアの詩と合せ覺えられたことは、其の名聲を最も久しきに耐へしむるに足るので、實に彼の曲譜ほど、ホイチアの歌詞にしつくり合ふものはない。

＊註　そのかみロマの Capitoline 丘陵の懸崖で、その頂より國事犯人を投げた處。ロマの一少女 Tarpeia は Sabine 兵の腕環を貰ふ約束で、市に兵士らをひき入れる。兵士らは、彼女の此の叛逆的行爲を潔しとしなかつた。彼女は此の懸崖の底に、兵士等の楯と腕環とに押しのめされて屍となつたといふ。

第四十八

『星をしるべに　とほく博士が』"As with gladness men of old"

（さんびか第壹編七〇・選歌集八一）

『かはゆきこども　こゝにこよと』"Come unto me ye weary"

（さんびか第貳編一二五・選歌集一六六）

吾等は既に本書に於て、クリスマス用の讃美歌に就て語り、其の作者たちのことにも説き及んだ。併し尚ほ一首『さんびか』第一編に收めてある歌で、其の固有の價値と世界の歌集中で高い地位を占めてゐるとの故で、特に此處に擧げねばならぬのがある。即ちDixの『ほしをしるべに　とほく博士が』といふ歌である。勿論この外にも、美しい歌が少くはないが、此の歌ほど弘く愛誦されてゐるのはあるまい。

此の歌はWilliam Chatterton Dix（一八三七—一八九八）が、一八六〇年若くは其の前後に作つたもので、其の翌年始めて"Hymns Ancient and Modern"の第一卷、即ち『試み刷』の『聖子顯現』の部に收められ、それから其の後英米で發行した、凡ての主なる歌集中へ轉載されたのである。

曾ていかなる英語讃美歌が、愛誦されてゐるかを試めすために、民衆投票法とも稱すべき方法が講ぜられた事があつた。一例を擧げて見れば、"The Sunday at Home"といふロンドンの一宗教雜誌が、其の讀者に各自が平素愛誦する讃美歌を問合せて、最も弘く歌はれるもの以下一百首を選んで、一覽表を作成せんとした。之に回答したものゝ數は、三千乃至四千で、各百首づゝを選み、各首初行の句を書き列ねて來た。この回答を比較し整頓して、一般世人が、果してどの歌を好むかを知らんとした。此の試驗の成績は、興味あり、且重要な事と考へられた。トプレデーの『ちよへし　いはよ』が、三千餘票を得て先頭

に立ち、又本書に評論した數々の歌も入選して、百首中に入つた。『ほしをしるべに　とほく博士が』も、百首中のものとなつた。この雜誌社の質問に回答したのは、當時英國の種々なる社會と階級の人々であつたので、讃美歌の効力、即ち基督敎徒の生活に、それが如何程の感化を與ふるかを決する方法として、此の試みが價値あるものであつた事が明かになつた。

此の外にも、代表的歌集中に收められた讃美歌より選擇した歌の一覽表が、作られたことがあつた。此の見地からしても、ヂックスの歌は前列に立つものであつた。

前に掲げた第二の歌、即ち『さんびか』第二編から拔いた『かはゆきこども　こゝにこよと』も同じ人の作で、第一のと同じく卓越した歌である。此の第二の歌も亦、"The Sunday at Home" の讃美歌一覽に收められてゐるといふ事實は、作者の名譽を一層高からしめ、更に彼が英語讃美歌の作者中で、高い地位

を占むべきものとの要求を支へるのである。

比較的にいへば、ヂックスはさう敎育のない人で、職業も歌に緣遠いもので あつた。彼は外科醫の子で、小學校以上の敎育は受けなかつた。そして其の敎育も商業的のものであつた。彼は僅に此の程度の敎育を終へて後、直ちに商業に從事した。勿論屢々文學界に手を出した結果として、其の商業を時々變更する必要もあつた。彼が產出した文學は、悉く敬虔的のものであつた。彼が此の方面で成就した秘訣を、同時代の一人が『彼は事務的の人であつて、しかも主なるキリストの心に近き生活をなし』た事に歸した。

宗派の關係から云へば、彼は英國敎會の人で、かつ其の著書の上から推測すると、高派に屬した。併し本編に引用した二首の歌には、單に彼が基督敎徒たるの資質を現してをるのみで、何等神學上又は宗派的の偏僻を示さない。

『星をしるべに』の歌の詞をよんだだけでは、誰も思ひよるまいが、これは

大病の全快した時の作である。ルカ福音書の第二章に記述してある東方の博士の來訪といふ物語を基礎として、想を構へた此の歌は、著作されてから爰に五十餘年、年ごとに救主降誕の大なる喜を證してゐる。

英國の名高い一貴紳が、一八六六年英國教會の大會議に於て、英語讃美歌といふ題で演說し、多くの歌から特に此の歌を擇び出して、大に之を賞讃し『いづれの點から見ても、賞揚すべき歌』と斷言し、教會の讃美歌は、將來みな此の歌の如きものとなるを望むと言つた。この貴紳はまた、現存の作者が、この樣な立派な歌を作つた事は、以て讃美歌をよむ時代が過去に屬したといふ僻見を除くに足るといひ、彼以外にも卓越した歌あり、作者ありと知ればとて、決してこの作者の地位を低うするものでないと論じた。

『かはゆきこども　こゝにこよと』は、一八六七年の作である。此の歌は自然ボナアの『つかれたるものよ　我にきたり』(第二十一篇參照)を思ひ起させる。

それはこの二つが、其の內に含んでゐる教理上、傳道上の精神が極めて類似してゐるからである。此の歌の日本譯は、逐字譯でないが、それは『さんびか』第二編が、主として兒童用にとて編纂されたからである。

此の歌の譜なる Bartholdy は、メンデルゾーン(第六篇參照)の作である。『ほしをしるべに』の曲は、Kocher の筆になつた Dix である。此の曲はまた Keble の『くるあさごとに』(さんびか第一編二)を歌ふにも用ゐらるゝもので、既に本書第五篇で說明し、且作者に關して評論した。Kocher の筆になつた曲を用ゐて、ヂックスの作歌を歌ふのは(此曲を Dix と呼ぶは此の故である)、自然のことであつて、英米の歌書は皆この例に從うてゐる。元來キーブルの歌は、英語の原形では、其の音律が此の曲と相適合しない故に、此の曲で歌ふのは、日本だけであらう。

ヂックスの筆になつた歌は、其の數中々多い。其のうちで、三十首乃至四十

首が教會用の歌書中に收められ、一般の歌ふところとなつてゐる。彼は又散文で、二三の修養書を世に出した。"The Pattern Life"と稱する兒童用の著書も、その一つである。

第四十九・五十

『あめつちの御神をば　ほめまつれ人の子よ』
"O worship the King all glorious above"
（さんびか第壹編五一）

『われらは塵の　なかにひれふし』"Savior, when in dust to Thee"
（さんびか第壹編二〇六）

『主エスのふたゝび　きたりすまでまもる』
"By Christ redeemed, in Christ restored"
（さんびか第壹編一四二）

『ひとのすがたの　まゝにのぼりて』"Christ to Heaven is gone before"
（さんびか第壹編九二）

『みそらのかなたに　ともこそあれ』"There's a Friend for little children"
（さんびか第貳編二二七・讃歌集三八九）

『こひつじをば　ほめたゝふる』"Crown Him with many crowns"
（さんびか第壹編九七・古今一〇〇・選歌集一〇五）

人が己の屬する邦家に盡すのと、王の王に奉仕する事との間に、密接な關係が存して居るのを考ふるは、興深く益ある事である。これ人は、二人の主に仕ふる能はず（マタイ六〇廿四）とのイエスの言と一見矛盾してゐる樣であるけれど、實は此の兩者の間に、根本の矛盾無き事、つとに主の明かにし給ひし所である。世の偉大にして顯著なる人々の傳記を見ても、兩者の關係の深い事が能く分る。茲に載せた始めの二つの讃美歌の作者 Sir Robert Grant（一七八五—一八三八）も、本書第三十五に論じたるサア・ジョン・ボウリングと同じく、さる類の人であつた。

グラントの場合を見るに、彼は政治界の高い生活の雰圍氣の中に生れ、壯年期の大半に亘つて、要職を占めたる人であると共に、その讃美歌に見る樣な、

神に對する單純な、熱ある信仰を常に持續して居た。父なる人は英國の國會議員で、重要なる蘇國の選擧區を代表し、又かの東印度商會の名で歷史に知られて居る團體の支配人として、當時の亞細亞世界と個人的關係をもつて居た。

抑もこの商會は、英國の實業家達の一團で、後年印度帝國と呼ばれ、英領中の重鎭となつた、南部亞細亞の大領土との商業を指導し、發達さするを目的として居た。父が東洋の事業に興味を抱いて、手を下して居た事が、或は息子なる彼をも、海外に雄飛せしめたのであらう。かれは Bombay に總督となり、死に先だつ四年間を印度で過ごし、そこで客死した。彼は一八〇六年ケンブリッヂ大學卒業の後、辯護士となり、數年間國會議員の椅子を占め、更に樞密顧問官の要職に進んだ。これは一八三一年、即ちヴィクトリア女皇の御即位のすぐ前で、印度に渡つたのは一八三四年である。

彼が公人として成した事業の卓越してゐたのと、基督敎徒として性格の高か

つたのとで、後人が一醫學校を設立して、彼の名を附したといふ一事をこゝに特筆したい。

サア・ロバアト・グラントは多くの讃美歌を作つた人でなく、その筆になつたものは十三篇に過ぎぬ。そしてこれ等が教會用として、今日を見るに至つたのは、彼の死後其の兄弟に當る人が、細心な注意と興味とをもて、これが保存に心掛け、これを出版したると、當時より近頃にかけての標準讃美歌中のいづれにも、彼の歌の數篇若くは全部を編入したのに依るのであらう。かく數少ない讃美歌ではあるが、著者の類ない深みのある宗教的實驗を物語り、永續的な愛好を必ず受くべき質の文學詩歌の型を具へてをる。こゝにのせた二篇は、十二篇中最も秀でたものと認められて居る。一つは一八三三年の作、歡喜の頌歌で、公の禮拜の始めに用ゐらるゝもの、中、この右にいづるものはない。他の一篇は一八二五年に成り、優しい連禱歌である。

人の能く知る第一の歌の譜 Lyons は本書第十八及び第三十二兩篇に述べたフランツ・ジョセフ・ハイデンの原曲を整調したるもの。第二の Blumenthal の譜の作者は Jacques（又は Jacob）Blumenthal（一八二九ー）として生れは獨逸人であるが、佛國の首都に教育をうけ、成人後は大かた英國で過ごした。壯年には英國でピアニストとして聞こえ、皇室の保護と眷顧とを忝うし、又音樂教師として、また一時世に持て囃された多くの歌の作曲者としても知られた。後の曲の出來たのは一八四七年で、ハイデンが其の原曲を出したのは一七七〇年であつた。

讃美歌作者は、職としては多く、神の福音を宣傳する人々であつた。併しその中には、普通の會友にして、尚有力なる作者――勿論婦人作者も含む――もあつた。今平信徒の顯著なる代表者の上を語り出したから、次にもさる人を紹介しよう。それは George Rawson とて、英國會衆派に屬し、其の生涯は、一八〇

七年より一八八九年に渡り、その長時期の聖歌界に著しい印象を留めた人である。彼もサア・ロバアト・グラントの如く、法律家であつた。其の特徴と見るべきは、宗教的敬虔の深い事で、その讃美歌によく寫し出されて居る。彼は敏感な隠退性の人で、孤獨を愛し、自然及び自然の神と交はるを好んだ。そして彼の才能と敬虔との果を承け續いだものは、啻に彼が屬した一部の人々のみでなく、教會全體であつた。彼の歌は五十篇以上であるが、その多くは廣く用ゐられてゐる。今述べた外に、こゝに載せる價値ある一つの理由は、歌の内容が獨斷的でない事で、從つて一般に用ゐらるゝに適して居る。又形が頗る多樣であるがため、新しさを有つてゐる。これは、最も令名ある讃美歌作者さへ、間間及ばざる所である。

『さんびか』の編纂者が、ローソンの讃美歌より特に選び出したものは、原作も飜譯も共に連禱歌の形式のものである。Dykes の Elm Street の譜に合せた此

の歌は、普通聖餐の歌の部の第一位に推されるが、實にしかあるべき作である。會衆派の人の抱いて居る聖餐の儀典の觀念とは、全然異れる意見の教會さへ聖餐式にはこの歌を用ゐて居る。この一事によつて見るも、此の種の歌にありがちな獨斷的なるが爲、一般に用ゐられぬといふきらひはなくて、敬虔な、公教的精神が、その句にみち渡つて居ることがわかる。さればこれを『さんびか』及び『古今』の『共通』の歌に收むべきであるのに、入れてないのは、聖禮典、バプテスマ、聖餐の歌となると、教會の慣例もある事とて、後に『さんびか』を編んだ人々も、日本聖公會の代表者である『古今』の編纂委員も、全くさる類のものは協議しなかつたからである。

聖餐に思を走せた此の勝れた歌は、遙に神の王國の宴會をのぞむと共に、現在の思が伴うて、奇異なる混和を見せて居る事も注目すべきである。聖餐の儀典は、神の國の宴會の靈感的象徴に外ならない。

作者自ら此の歌を一八五九年の作として居るが、これが或る浸禮派の歌集に初めて出版されたのは、其の翌年であつた。譜は一八六五年、Dykes 博士がウォーズウォースの "O Lord of heaven and earth and sea." (あめつちをしらすたふとき神の) (さんびか第一編一五〇・古今七七、本書第二十五篇參照) の原詩に合はせて物したのであるが、日本譯は、音律を異にしてゐるため、此の譜は用ゐられて居ない。

"Christ to heaven is gone before" (ひとのすがたの まゝにのぼりて) も、ローソンの作で、『さんびか』第一編九十二にあつて、今述べた浸禮派の聖歌集出版の年なる一八五八年にかゝれ、同書によつて世に紹介された。此の歌の譜は Louis Moreau Gottschalk (一八二九—六九) の作である。ゴットシアルクの音樂者としての經歴は、興味あり、又或る點に於て比類なきものであつた。彼は米國 New Orleans に生れ、父は英人、母は佛人であつた。彼の心が音樂に傾いて居

る事が、明かになつたので、兩親は彼を巴里に送つて敎育した。十六歲にして、彼は既に作曲家として音樂界に名を知られ初めた。僅か二十三歲の時、歐洲に演奏旅行をなし、至る處で歡迎された。後年にも南米の諸都會にゆいて演奏し、Rio de Janeiro で客死した。彼は勿論多くの月日をその生地に過し、他所に於けると同じく『最も秀でたる米國洋琴の名手』として認められた。作曲では、シムフォニー、歌劇、歌謠曲等があつた。ピアノ樂も多くあつたが、その大部は今は忘れられた。併し當時は持て囃されたものであつた。これを思ふに、彼をして世の記憶に永久に止めしめ、此の點に於て疑惑なからしめたものは、彼が比較的に大志を抱いて努力した音樂中の一方面ではなくて、宗敎のために用ゐられたその特種の方面にあつたのである。Mercy の譜は、米國の標準讃美歌にはいづれにものつて居る。

宗敎界の人でなくて、聖歌作者間に頭角を拔んでたる今一人は、始めて爰に名

を記す人、描寫的で、諧調に富む天國の頌歌"There's a Friend for little children"（みそらのかなたに　ともこそあれ）（さんびか第二編二二七）の小兒用の歌の作者Albert Midlane（一八二五―一九〇九）である。

ミドレーンは、英國南海岸の彼方なるIsle of Wightに住ひ、鐵器商を營んで居た。彼の一生中の活動は、文學の方面ばかりでなく、主に宗教的であつた。彼は教職ではなかつたが、『嚴正教徒』とその地方で呼ばれたるキリスト教徒の教團の首腦であつた。そしてブリミチーブ、メソヂスト派と緣故あり、定期に公會演說――講壇の務――をなす上に、筆を執る所から自づと詩人說教者の綽名を得た。彼は僅か十七歳の頃から執筆し、かつ作者として世に知られ、その作歌（彼は主として其の力を讃美歌に注いだ）の總數三百餘にも上つた。『さんびか』作家者索引に、八百とあるは誤謬である。彼の歌の大部は、兒童のためのもので、始め子供の雜誌とか、傳道用の讃美歌集とか、即ち教會の正式な會

合のためよりも、むしろ福音宣傳の用にあてた歌の本に現はれたのである。短命なこれ等の聖歌集に載つた歌の中、佳作は英米の標準讃美歌に收められた。こゝにのせた歌は、一八五七年に書いたもので、監督派、長老派、會衆派等諸種の宗派を代表せる十五種の聖歌集中の十二種に掲載され、又日曜學校用の九種の聖歌集には、洩れなくのせられてゐる。その讃美歌は、概して詩の形からいつても、作の價値からいつても、高い平面に到達しないものであるが、人に快感を與へ、靈想にみち、聖書に基づく語句が多い。此の天國の讃美歌が、人々に喜ばるゝ所以は、一には英國教會の"Hymns, Ancient and Modern"に、それが編入された一八九五年に、Dr John Stainerが In Memoriam（追懷）と題した、優れた伴奏を供したると、又一つには Mira Rowland 女史が、瑞典の曲をもとゝして、比較的近頃の譜（一九〇七年）を整へたのにもよるのである。これは『さんびか』には、作者の名を附して、換譜としてのせてある。スタイナ

ーの事は、本書第二十九篇を見られよ。ローランド女史は、米國バプテスト派の人、Philadelphia に住ひ、該市の浸禮派の教師にして、其の地のバプテスト出版會社の長なる人の女であつた。女史は、自分の歌をかなり容れて、小兒用の歌の本を編輯してそこから出版した。

"Crown Him with many crowns" (こひつじをば　ほめたゝふる)(さんびか第一編九七) なる有名なたゝへ歌の作者 Matthew Bridges (一八〇〇—九三) は Canada にて一羅馬公教徒として死んだ。彼は晩年をカナダでおくつたが、生れは英國で、教育もそこの國教會で受けたのであつた。彼が一八四八年羅馬教徒に轉じたのは、本書第四、五兩篇に於て論じたかの有名なオクスフォード運動の影響であつた。これ以外彼の名にさしたる興味を惹起すものはなく、その生涯は至つて平穏であつたらしい。併し『さんびか』にも『古今』にものつた、此の『共通』の歌の姿を見るに、これを物した筆は、確に茲にしるさるゝ價値あるもの

である。作者の秀逸と認めらるゝものは、A Song of Seraph (セラフの歌) と題し、眞にセラフの歌にふさはしいものである。セラフが歌ふに當つて用ゐるだらう、否用ゐてゐるだらうと思はれる樂譜が、地上に聞えるものであつたら、地に在つて信じて耳傾くる人々や、その集ひの參與者と自からを見る人々の喜悅は、いかばかりであらう。誰か、偉なるコーラスに、心より喜んで加はらないものがあらうか。此の歌が一八六八年 "Hymns Ancient and Modern" の修正版に選ばれた時 Sir George Job Elvey は、そのために換譜として見事な Diademata の譜を添へた。この譜は、其の後の種々の集に、いつも用ゐられた。

Elvey (一八一六—九三) は、出身校なる Oxford 大學より音樂博士號を得た人で、一八三五年より同八十二年に亘る四十年間 Windsor 王室禮拜堂のオーガニストであつた。一八七一年皇族のある姫宮の御結婚の際、彼は特に丹誠を籠めて、音譜を作つて、これを獻げた。ヴィクトリア女皇は、その際彼を Knight の位

に叙せられた。同じ作者のものに『さんびか』第一編二一一（同二編一三七）と、同じ第一編三七八とがある。後者は Dean Alford の "Harvest Home Selection" にのつたもので、これに關しては、第五十六篇を參照せられたい。エルヴェーは、餘り讃美歌の譜を作らなかつた。併し彼が教會に與へたものは、品位と力と諧詞とを兼ねて居て、理想的の譜ともいふべきである。『さんびか』第一編二一一の St. Crispin の譜は、Charlotte Elliott の "Just as I am, without one plea"（いさをなきわれを　血をもてあがなひ）（本書第十六篇參照）の譜としてかゝれたもので、作曲者の葬式の折歌はれた。此の作者が、久しい間盡した聖堂のすぐそばに葬らるゝ榮譽を擔つたことも、書き落したくない。

＊選歌集の編纂に、此の歌が洩れたのは殘念な手ぬかりであつた。

第五十一・五十二

『なつかしくも　浮ぶおもひ』"One sweetly solemn thought"
（さんびか第壹編三三八・選歌集三〇三）

『あらなみさかまく　八重の潮路に』"If you cannot on the ocean"
（さんびか第壹編一五九）

『ものはかはり　世はうつれど』
"I will sing you a song of that beautiful land"
（さんびか第一編三四二・選歌集三一七）

十九世紀の始め、米國 Ohio 州のある農家に、姉と妹と二人の女流文學者が出でゝ、米國文學史上に其の跡を留めた。Cary といふ姓で、姉を Alice（一八二〇年生）、妹を Phoebe（一八二四年生）といふた。彼等の父は、野に耕す間もヘブライの詩人の句を誦んずるを常としたといふ。されば其の娘等が不利なる境涯に

處して、なほ宗教と文學との興味と趣味とを涵養し、發達させ得たのも、故ある事である。初めて世に出でたる彼等の書物は、二人の才能が結んだ果實であつた。公衆はこれを喜び迎へ、報ゆるに、紐育市に家を構ふるに足るの便宜を以てした。其の時姉は三十歳程であつた。姉妹は濃やかな愛情の中に、人に嫁する事もなく、比較的短かき生涯を偕に過ごした。姉アリスが、一八七一年に世を去つてより、フイベは遣瀬なき悲嘆にくれ、同じ年その跡を追うた。二人の文筆の才は、略同じほどの者であつた。詩の卷數卷、散文の書若干部、此等は重に物語類であつた。詩の方は兩人の作を選び載せたもので、讃美歌として歌はれ、讃美歌集に收められたのもある。妹フイベが、重に編纂に當つて、一八六九年に出版した本に "Hymns for all Christians" (信徒用讃美歌集) といふのがある。これは姉妹が屬して居た、紐育の The Church of the Strangers といふ獨立教會で用ゐられた。『なつかしくも うかぶおもひ』の一篇こそは、姉妹の

名を後の世に傳へたもので、この點に於ては、二人の他の作は、詩にせよ、文にせよ、この歌に及ぶべくもない。此の歌は人口に膾炙し、殊に Dwight L Moody 氏の福音宣傳運動に用ゐられて、英國に流布してから、人々の能く知る所となり、歳と共に普及して、用途も廣まり行く一方である。

此の歌が、如何ばかり善事の奬勵となつたかに就いて、面白い話がある。其の事のあつた場面が、東洋であつたといふのも興深き事である。

二十歳も年の違ふ二人の男が、Macao の支那人町の、ある巣窟で、賭博をしながら酒を飲んで居た。一勝負ついて、年上の男が紙牌をわけて居ると、若い方は椅子に脊を凭せながら、讃美歌の譜を氣なしに、片々に詞をつけながら、口吟さんだ。それはフイベの歌で、數年前若者が、米國で日曜學校の生徒であつた時おぼえたものであつた。年上の男は、能く知つてゐる此の歌をきいて、記憶を喚び覺まされ、眠れる良心も醒めて、語氣强く『Harry, 其の歌は何處でな

らつたんだ』ときいて、"One sweetly solemn thought comes to me o'er and o'er."『なつかしくもうかぶおもひ』とたつた今、無心に此の若い賭博者の唇を洩れた詞を繰り返した。賭博處といふ魔窟で歌ふのには、慄かるゝばかり應はしからぬ詞である。『さあ子供の頃、亞米利加の日曜學校でならつたのだらう』と答へると、年長の男は、紙牌を放り出しながら、卓子から立ち退き、『これで賭博もおしまひ、酒もおしまひにする。今勝つた金も、さあこゝにある。みんなおとりなさい。君、握手をしようじやないか。そして賭博癖もぷつゝり止めて、今から眞面目な人間らしい生涯にはひらうじやないか』といふた。二人は手に手をとつて、此の場所をさつた。とにかく年上の男の方は、それから熱心な、信心深い基督信徒になつたといふ。此の始終を目擊したのは、Conwell といふ旅人、今は米國 Philadelphia 市の浸禮派の牧師で、その青年に、海を距てた米國の友人から、ことづかつた物品と便りとを渡すために、青年を尋ねて、そこ

に行き合はせたのであつた。コンウエルが、親しく見聽きした事を、後年此の歌の作者に物語つた時、作者の喜悅は推察するに餘あるものであつた。

神の攝理は、かくも美しく人生の事に示され、時を隔て處を變ふる事、如何に大なりとも、何の妨なくして行はるゝのである。大能の御手は短かくして救ふ能はずといふ事はない。此の歌は、作者が一八五二年のある日曜日の朝、神の家の禮拜より歸つて、紐育の廣からぬ住居の、二階の寢室で書いたのであつた。それが年經てから、他の半球に、めでたき果を結ばうとは、誰が知らう。

『さんびか』にあるフィベの歌の譜であり、又マカオの挿話に歌はれた時の譜でもある Solemnly は、前世紀の米國の福音唱歌者たちの組に早くより屬して、其の人ありと知られた Philip Phillips（一八三四—九五）の作である。彼はシャトークワ文藝振興會（第五十四篇參照）の起つた、紐育の Jamestown に生れ、壯年期の大部分を福音師として奔走し、或は朗々たる音聲を集會場にきかせ、

或は作曲や編纂に筆を走らせなどした。彼が編纂した讃美歌、及び譜の集は、三十卷に上つた。その典型とも見ていゝのは、Sankey の "Gospel Hymns" (福音唱歌) の先驅をした "Hallowed Songs" (聖なる歌) であらう。彼の筆に成つた數ある旋律は、それ〴〵 Hubert P. Main の如き、其の道の音樂者の手によつて、永久に傳はるべき整へる姿のものとされた。かのサンキーが、福音唱歌者となつたのは、ムーデーの懇篤なる招きによるとはいへ、フィリップスが獨唱家として、一世を風靡したことが、彼にとつて靈感となつたからでもある。かくしてエリヤの上衣は、エリシヤの肩に授けらるゝに至つた。然しサンキーの若い頃は、歌巡禮といはれたフィリップスこそ斯界の明星であつた。そは大統領リンカーンの時、米國の首都 Washington で、彼が經驗した左の事に徵して明かである。

頃しも南北戰爭の最中であつた。陣營や戰場にある兵士等に、博愛的、宗教

的興味を起させるのを目的とせる、The Christian Commission (基督教委員團) といふ一團體があつた。それを輔助する爲に、ある會合が開かれた。該委員團の長は、時の國務卿であり、その會場には、壯麗結構を極めた建物の中の上院があてられた。堂の中は、政界の覇者、陸軍の將官、其の他萬人の口に其の名の上る當代の名士等が滿ちて居た。大統領リンカーンも、又其の席にあつた。歌を歌ふやうに依頼されて居たフィリップスが選んだのは、『さんびか』第一編一五九『あらなみさかまく　八重の潮路を』の原文 "If you cannot on the ocean Sail among the swiftest fleet" であつた。其の時大統領は、もう一度會の終に、此の歌をうたつて貰ひたいといふ事を、紙にかいて司會者に渡した。歌は勿論繰返された。歌ひ方も立派であつた。それに歌の選び方も、その場合にしつくりとあつてゐて、人々を感動させたのである。かく目覺しと人の見る歌うたふ才が、廣く認めらるゝに至り、こ

れが動機となつて、歌巡禮の企てらるゝ樣になつたのは、怪しむに足りない。又歌人が、果ての日迄の道すがら、神に忘るべした數多の魂の誕生を、天のみこそはしろしめさるゝのである。リンカーン大統領の意に協うて、懇望され、其の後も大統領の愛吟せしものといふ此の歌は、Ellen M. (Huntington) Gates（一八三五―一八六三）夫人の作である。譜は "Your Mission" として Sidney Martin Grannis（一八二七―）の作りしもの。彼は時に歌をかき、且北米合衆國にて音樂會に出演する勝れた唱歌者であつた。又フィリップスの樣に音量の豐かな、力ある美くしい聲をもつて居たといふ。

ゲーツ夫人のこの歌は、一八六一年より同二年に渡る冬のある雪の日に、一氣呵成にかいたもので、數節を草し、完成してのち、初めて其の歌の使命が明かになり、印象深きものなることが認められたのである。『あの歌は獨りでに出來たのです』作者はそのめでたさが、自分の力によるのでないといふ事を表は

す爲にかういつた。彼女は、始より讀み返した時、感謝にみちた謙讓な心持で跪づいて、熱誠こめた祈禱と共に、それを神の御用に捧げ、爾後その目的をよく果たし來つた。歌は直に賣れ行きのいゝ宗教雜誌に掲載され、その力と、影響とを、遠く迄及ぼした。

さらに『さんびか』に、ゲーツ夫人の名を留むる歌は、"I will sing you a song of that beautiful land"（ものはかはり　世はうつれど）（さんびか第一編三四二）で、これは一八六五年フィリップス氏に依頼されて、かいたものである。氏はある日『天路歷程』(Pilgrim's Progress) 中の Christian と Hopeful との兩人が、死の河を渡り、輝ける岸に上つた時、心も浮きたつ天つ調べが起つた件を讀んで、これは又地上に歌はるゝ讃美歌の題としたらよからうと考へて、折しも彼が The Singing Pilgrim（歌巡禮）と題して、出版しようと計畫してゐた讃美歌集にいれたいから、一つかいて下さらぬかと、ゲーツ夫人に請うた。かくしてえ

たる歌が手にはひつた時、フィリップスは幼い男の兒を膝にのせて、オルガンの近くに座つて居た。前の卓子には Bunyan の書が、廣げてあつた。彼が其の時書き下した譜こそは、今日迄人々に歌はれて來た伴奏の譜である。Gates といふ名は短かいから『さんびか』編輯者が、此の譜につけたのである。最初から歌詞も譜も、いたく持て囃された。作曲者が喜んでいつたやうに、それは敬虔なる高派の國教徒にも唱へられ、救世軍の饒鈸や、大鼓の轟響の中にもひゞき、或は獄窓にて、或は絞首臺より幽冥界に送らるゝ罪人の爲に獄庭にて歌はれ、其の他世の常の幾百の葬式に用ゐられた。作曲者は、此の譜の生れ出でた時膝に抱いて居た、男の兒の葬式にも、それの歌はるゝのをきいた。彼の圖書中には、此の歌の七ヶ國語のを收めたものがあつた。そして遂に彼も亦、死の河を越えた時、かれの上衣を授りたるかのエリシヤ（即ちサンキイ）が、葬の式にこれを歌つて彼を送つた。

第五十三・五十四

『やみにこの世の　かくるゝなべに』"Day is dying in the west"
（さんびか第壹編三四・選歌集三〇）

『すゞしきこゑを　あげてこども』"Lift up, O little children"
（さんびか第貳編八八）

『むくいをのぞまで　ひとにほどこせ』"Cast thy bread upon the waters"
（さんびか第壹編一五一）

『ゆふ日のなごりは　うすれゆきて』"The shadows of the evening hours"
（さんびか第壹編一六・選歌集一二）

『父の御神よ　わが世のたびぢ』"I do not ask, O Lord, that life may be"
（さんびか第壹編三一二）

『あゝほむべきかな　わが主よ』"My God, I thank Thee who hast made"
（さんびか第壹編三七七・選歌集三二九）

『神よわれはいま　めぐみのあめの』"Lord, I hear of showers of blessing"

（さんびか第壹編一六四・古今三九一・選歌集一八七）

『やみよのとばり　やゝにひらけ』"The sands of time are sinking"

（さんびか第壹編三五〇・選歌集三一一）

『さんびか』に見える女流作家を評論し來ると（一人も洩さじとするではないが）、稍珍らしい方面に關係して居る二婦人が現れる。それでまづ其の二人を說かう。即ち一人は Swedenborg の說を奉ずる Mary Artemisia Lathbury 女史（一八四一年生）、もう一人はユニバーサリスト（同仁教徒）Phoebe A. (Coffin) Hanaford 夫人（一八二九年生）である。

ラスベリ女史は、米國メソヂスト派の牧師の家に生れ、其の空氣を吸ひ、該派の唱導する基督敎の信仰に育まれて人となつた。然るに女史は、五十歳になつて、新エルサレム即ちスヰデンボルグ敎會に籍を移した。美術家としても世

にたつたが、寧ろ文學の方できこえ、雜誌其の他に筆を執り、又今では名高いものとなつた米國の Chautauqua 運動に關聯して、其の名を知られて居る。シャトークワといふのは、地理のうへからは、紐育州の小さい湖の名で、此の美しい水の滸に、幾多の人々が、毎年集まつては、メソヂストの天幕集會に倣つて、宗敎味もくはへて、知識の啓發を計つた。此の運動を特に名付けて『シャトークワ文學及び理學會』とも云つた。內外の名士の講演に加へて、第一流の音樂乃至文藝上の催もあり、また家庭にあつて、或は職業の餘暇を用ゐて、研究の出來る諸種の學問を組織的に授け、修得した結果は、丁度試驗の答案と同樣に提出させて、學校や、カレヂの卒業生に與へるものに類した修了證書を交付した。此の設備の根本義は、近頃 University Extension（大學の門戶解放）といふ特種の名の下に、存在し來つたものと大に似て居る。近來此のシャトークワ運動が發展し來つて、全國諸所に出張し、又は支部の會を催すなど、何れも

開會期は數日に亘り、一般の便宜に協ふ樣に時刻を計つてある。これは本元の湖畔の集會場一つでは、とてもこの會の利益を江湖に傳へようといふ目的が、果せないからである。

ラスベリ女史は、シャトークワの本局と交渉を持つて居た。そしてその力と勢力との發展に注いだ彼女の興味と精勵とは、其の作『やみにこの世の』(Day is dying in the west) の歌となつて最もよく表はれ、最も久しきに耐ふるものとなつた。夕頃になると、會に出席して居る學生も訪問者も、皆集つて宗教禮拜を行つた。此の歌は、その會の總理事 John H. Vincent 監督の懇切な依頼もあり、さる會合の極めて敬虔なる上にも敬虔なれかしとの心で、一八八〇年の夏書いたのである。啻に湖畔にてのみならず、至る處に愛吟され、豐かな福祉の源となつて、年經るまゝになくて協はぬものとされ、用途いやが上に增し行くを見れば、其の目的は確に遂げられたといつてよい。英國の讃美歌批評家

の大家 Horder 氏は、『夕の歌』として、これは第一位に推すべきもの』といつた。一つには、その譜にもよるであらうが、此の歌は確にかゝる位置を占めて居る。熱心なシャトークワ會員で、一八七七年此の歌のために作曲した William Fisk Sherwin (一八二六—八八) に就ては、本書第三十篇に既に之を述べた。

ラスベリ女史の作で、シャトークワの會合を髣髴たらしめるめでたい歌で、米國の基督教徒間に一般に用ゐられてゐるのが、もう一篇ある。それは "Break Thou the bread of life" (生命のパンを割き給へ) 云々の歌で、日本の『さんびか』に載つて居ないのは手落であつた。併し幸にして女史の復活祭の歌『すゝしきこゑを あげてこども』(Lift up, O little children) は『さんびか』第二編に收められ、確に譜のよろしきを得たる爲、人口に膾炙する樣になつた。作曲者 Mary Elizabeth Seward (一八四九—) は、一九〇二年に沒した米國の名高い音樂評論家 Theodore Frelinghuysen Seward の未亡人である。

Hanaford 夫人は、婦人で Reverend の稱號を持つて居る人として名を知られてゐる。又長い一生を通じて、牧會に文壇に活躍した舞臺の多種多樣な點からも、些かも人爲に依らない榮譽を受くべき人である。父母は友會派の人であつたが、彼女は新教監督派の師導と庇護との下に教育され、後同仁教徒となり、該教團の説教者となり、一時はエール大學の所在地なる New Haven といふ名高い所で、教會の牧師をなし、且ニューヘブンは時の州の首都であつたので、禮拜主事として、Connecticut 州の立法部にも勤めた。又婦人で、牧師となる男子に接手禮を施した例は、まづなかつたが、夫人は此の役を依頼された。又牧師として結婚式を司どつた。其の一度は、自分の娘の式の折であつた。夫人は詩に散文に其の筆を振つて、婦人雜誌の記者ともなり、又彼女が成功を贏ちえてきた團體と、時勢一般とを彩づた諸種の改革運動に參與して、目覺しい活動振を示した。

『さんびか』にある夫人の作とされて居るのは、ある傳道雜誌のために書いたもので、それが當時のあちこちの雜誌に轉載されたので、その出來始めから『ほんの新聞の宿無し兒』であつた。然し今では米國で用ゐられてゐる幾つかの讃美歌集に編入され、又歌の標題なる Work and Wait（働きて待て）の二字に現れてゐる使命を傳へるといふので、その勢力の永久的なものとなつた事を思はせる。

Offering（獻げ物）といふ伴奏の曲譜の源は、明かでない。讃美歌の頭註に記した "The Finest of the Wheat"（詩篇八一〇十六）といふのは、此の譜が載つて居たと信ぜらるゝ前世紀の七十五年頃の出版で、祈禱會及び日曜學校用のメソヂスト派の讃美歌集の名にすぎない。

上に掲げた二つの例と同じく、所屬の宗派を變へた婦人は、Adelaide Anne Procter 女史（一八二五—六四）である。女史は羅馬公教徒として、其の晩年十三年

を過した。彼女の場合は、宗教に熱心なと云ふ方からでないにしても、詩人的見識と、文筆の熟達といふがはからは、遙かに前二者に優つて居る。これは飜譯によつて『さんびか』の頁に潤澤を添へた彼女の作歌三篇を讀んでも、明かである。日本文の文學的價値は、勿論譯者の才に歸すべきであるが、內容の勝れたるは、その詩的たると宗教的たるとにかゝはらず、原作者の譽に當然歸すべきものである。

ブロクター女史は、倫敦に生れた。父は Barry Cornwall の雅號の下に、當時の文壇に一勢力として知られた人である。故に彼女の文才は、幾分父から承けついだもので、殊にそれを用ゐるに當つて有用ならん事を期したる事とて、見事なる効果を收めえた。彼女の筆になつた讃美歌や、"Cleansing Fires"（潔めの火）や、"The Lost Chord" の如き、宗教の歌として、わけても人に愛吟さるゝものは、苦しむ者に力と慰安とを與へ、社會の階級や、基督教の派のいづれをとは

ず、多くの人々をして、基督教のさらに大なる努力に力を致さしむる上に、豐かな實を結んだ。讃美歌の上から見て、作者が公教徒であつたといふことは、Newman や Faber（第四、二七、二八各篇參照）が、公教徒であつたと同じ樣に、何のさゝはりもない。彼女の作の中一つとして、どの宗派にでも向かないものはない。彼女は先づ第一に敬虔な基督信徒で、第二に公教徒であつたのである。

ブロクター女史と小說家 Charles Dickens との間に、文學上の興味ある干係があつた。女史はヂッケンスが編輯して居た雜誌に、匿名でよく寄稿してゐた。或日ヂッケンスは、女史の父なる有名な著者を訪れた時、Miss Berwick といふ投書家は、實にいゝ文を書くと云つて譽めた。談に出た假名も通信も、彼女のであることは、女史が巧に隱してゐたのである。ミス バーウィックと別人ならぬミスブロクターは、稱賛の辭が呈された時、其の場に居合はせて喜びもし興がりもした。編輯者に寄稿者の誰であるかゞ分つたのは、其の後の事であつた。

プロクター女史の文學的事業の多くは、何等かの仁慈的努力の性質を帶びて居た。彼女が病める者を訪ひ、無智なる者を敎へ、或は蹂躙られたものを起たし、わけても女性に對しては、倦まず、たゆまず、いそ〳〵と盡した所に、同じ精神が現はれて居る。此の樣な事の爲に、彼女の體力は衰へ行き、虛弱の身となつて、其の死に先だつ一年餘は、全く役にたゝない體となつた。其の間の彼女は、其の作歌によつても知らるゝ樣に、基督敎徒としての忍從と信賴の極致を體現して居た。上にあげた三つの歌の中、第二、第三は一八五八年出版の Legends and Lyrics（古譚と抒情詩）と題する詩集に現はれ、第一は四年後の一八六二年出版の同じ集の增版に出たものである。英國の讃美歌作者たり編纂者なるピカアスデス（第三十四篇參照）は、此の三篇の歌の中第二が『苦難中なほ感謝の絃線に觸るゝところあるは、外の英語讃美歌の遠く及ばない所である』といつた。此の第二の歌の譜 Jasmine（素馨花）といふのは、もと支那のものである

のを、明治三十四年北淸事變の際、匪徒鎭壓の爲北京派遣隊に參加した陸軍大學敎授岡田大尉が、同年の春、日本に持ち歸られたものである。氏は直隷省の山海關の市のメソヂスト敎會で用ゐる讃美歌中に、これを見出だしたのである。『さんびか』編纂者はこれに少しく筆を加へて採用した。それは日本語にうつしたプロクター女史の歌詞に附すべき曲としては、原曲をそれにあふ音律にかへる必要があつたからである。

『あゝほむべきかな　わが主よ』(My God, I thank Thee) に伴なふ譜 Wentworth の作曲者は、Frederick Charles Maker（一八四四年生）で、既に本書第三十七篇に記した。作譜の『夕べの歌』と關聯して覺えらるゝ St. Leonard の譜は、英國のオルガニストで作曲者なる Henry Hiles（一八六二―一九〇四）の作である。彼は Manchester 市の音樂學校の敎授で、暫くは The Quarterly Musical Review（季刊音樂評論）といふ音樂雜誌の主筆をした事もあり、其の作には聖樂、敎會用

樂曲、歌謠などもあり、又音樂に關した幾多の著作もある。

『神よわれは今　めぐみの雨の』(Lord, I hear of showers of blessing)の歌は、一八六〇年より一八六一年に亘る冬に、愛蘭土に起つた信仰復興の大會の場所でかゝれたといふ。作者は倫敦に住居した一婦人で、英國教會の牧師の妻なるElizabeth Codner(一八三五年生)である。夫人はその作歌に窺ひ知らるゝ精神をもて、今も該市の教會や慈善事業に忙がしく盡して居られる。此の歌の人の心を動かすのは、疊句のEven me(わが上にも)といふ詞にもよるのであらう。ゆゑに今述べた樣な場合、わけてもD. L. Moodyの信仰復興會で、人の決心を促す有力な手段ともなつた。又此の讃美歌は、祈禱の精神にみちて居て、又それが極めて個人的、私人的であるが爲に、基督教信徒の禮拜に、概して重要なものとさるゝに至つた。從つて近代の讃美歌にして、これを收めないのは少ない。

此の讃美歌が、どれ程役にたつたか、又公會堂の說教よりも、讃美歌の內容

の方がどれ程、頑くなゝ心に觸れて、發心させ得るかを示す一例として、左の話をのせよう。流行社會のある英國婦人が、英國教會の傳道者Rev. W. Hay Aitkenが主催する、福音宣傳會に出席することを勸められて行つた。此の婦人は、其の時の說教者の話には、少しも感じなかつたらしく、それが了つて會衆がコドナア夫人の此の歌を歌つて居る間に立ち去らうとしたが、歌の詞も譜も耳新しかつたので、歌の內容と譜の輕快なのに心を引かれ、途すがらも、家に歸つてからも、忘れる事ができなかつた。そして其の夜ねむる前に、彼女は己が救主として、基督を受け入るゝの幸ひを得た。人心の琴線は、數多く、類もさまゝである。感情の音に鳴り出づるもの、必ずしも理性の調に劣るとはいはれない。何れも授かるものが同じであると共に、今は之を、次に彼をと用ゐるのは、凡てが神の攝理の經綸になくてかなはぬものなるを明示して餘あるものである。Even me(一八六二年作)の譜の作者William Batchelder Bradbury

（一八一六—六八）の事は、本書第十六篇を見られよ。

こゝにもう一つ、女性の手になつた天國の歌で、『やみよのとばり　やゝにひらけ』（The sands of time are sinking）といふのがある。本書を落なきものとする爲にも、一言しなければならない。作者は蘇國の長老派の自由教會の牧師の妻 Anne Ross（Cundel）Cousin（一八二四—一九〇六）で、一八五七年に書いたものか、さなくとも始めて出版されたものである。夫人は尙外に讃美歌や、詩を物したが、それは昔の蘇國の聖約者（Covenanters）の趣ある默想的にして、敬虔なる作である。これは、此の讃美歌を書いた時の彼女の詩的感興の源と見做すべきものが何であるかを、詩人自らよりもよく示してゐる。又いつも此の歌の譜として用ゐらるゝものに、Rutherford の名を附してあるのも、又それを證して餘りあるのである。Samuel Rutherford（一六〇〇年生）は、十七世紀の教職で、當時勢力のあつた、政府の政治的宗教政策と容れざる、宗教上の確信を抱いて居た

爲に、迫害を受けた。チャールス一世王及びクロンウエルの代を距てゝ王となつたチャールス二世は、二人共公教を奉じて居た。それのみならず、教會政治についても、蘇國の長老制度に反して、教長政治、即ち監督政治をよしとして、峻嚴な高壓手段をさへ用ゐて之に就かせようとした。カルヴィン主義を奉じ、長老制度を守るに加へて、暴君が恐るゝ程の大なる才能をもつて居たが爲に、ラザアフォードは苦難にあひ、獄裡の人と迄なつて、はては斷頭場にも引かる る筈であつたが、病重くして命旦夕に迫り、刑場に歩を運ぶ事のかなはなかつた爲に僅にそを免れた。入獄中彼が許されて認めた山なす書翰が、國教を遵奉せざるべき事を奬勵し、人々に自己の主義を守らしめたといふので、反逆者と言ひ立てられたのである。遺り傳へられた彼の手紙は、歴史の上に Covenanters（聖約者）といふ名を得た宗教的精神が、如何ばかり力あり、深さある者であつたかを、有力に證據だてゝゐる。Covenanters とは、國家の當局者が皇帝のあら

ゆる臣下に強迫的に強ふる宗教の形式は遵奉すまいと、所謂『嚴かな同盟誓約』を締結した一團の教職等の事である。挑戰的、反抗的の精神のあると共に、又極めて敬虔なる思ひが、ラザーフォードの書に見ゆる反駁の裡に存して居り、又二百年といふ時の距離にかゝはらず、カズン夫人の讃美歌にも反映されて居る。此の敬虔と此の詩的表白あるが爲に、『偉なる證しの讃美歌』と呼ぶものゝ内にあつて、彼女の歌が永久の位地を贏ち得るに足るのである。全詩は百五十二行より成り八行を以て一節としてある。讃美歌編纂者は、通常此の十九節中の六節を選んで、集中に收めて居る。『榮光！榮光はイムマヌエルの地にあり』とは、此の蘇國の聖者の、息絶えんとする唇より洩れた言葉で、カズン夫人の讃美歌に、幾度か折返して用ゐられてゐる理由をこゝに見るのである。

Rutherford の譜の原曲は、前世紀の初期の佛國音樂家 Chretien Urhan（一七九〇―一八四五）の作である。彼は大に其の名を歌はれた人で、一時は巴里の公教會

のオーガニストで、又巴里の大歌劇場の合奏團の獨奏ヴァイオリニストでもあつた。Rutherford Cousin の歌の伴奏の譜となつたために、作曲者の最も久しきに渡る紀念碑となつた此の譜は、それが掲載された "Les Chants Chrétiens"（基督教歌集）といふ佛蘭西の讃美歌集の出た年、即ち一八三四年の作である。

第五十五

『けふをもおくりぬ　主につかへて』
"One more day's work for Jesus"
（さんびか第壹編二八二・選歌集二八〇）

『主われをあいす　主はつよければ』"Jesus loves me, this I know"
（さんびか第壹編四一八・古今二二二）

『うみ川野山　よろこびつゝ』"The world looks very beautiful"
（さんびか第貳編一三三・選歌集三六五）

『めぐみふかき　主のほか』"I need Thee every hour"
（さんびか第壹編二六九・古今三〇四・選歌集二六六）

『いともかしこし　エスのめぐみ』"I love to tell the story"
（さんびか第壹編二八一・古今一九五・選歌集二七九）

『つとめいそしめ　はなのうへの』"Work, for the night is coming"
（さんびか第壹編二八四・第貳編二〇七・古今三四二・選歌集三一一）

『わが主エスよ　ひたすら』"More love to Thee, O Christ"
（さんびか第壹編二五四・古今三四七・選歌集二五三）

『こよなきめぐみの　きみが十字架や』
"To Thy Cross, dear Christ, I'm clinging"
（さんびか第壹編二六〇・選歌集二六四）

『おもへばむかし　エスきみ』"I think when I read that sweet story of old"
（さんびか第壹編四二〇）

前に述べたCary姉妹と時を同じうして、人の羨望に價する文名を贏ち得た、二人の米國婦人がある。實名はSarah（或はSusan）WarnerとAnna Bartlett Warner（一八二〇—一九一五）といつて、The Wetherell Sisters（ウエザリル姉妹）の雅號を用ゐて居た。『さんびか』にある六篇の歌は、アンナ・バートレットの作りしものとい

ふ。本章の始めに載せた三篇も、その數に入るべきものである。ケリ姉妹の如く、ウエザレル姉妹も、一般文學に筆を執り、彼等の合作小說は前世紀の第六十年前後に、頗る英米二國の人氣を博した、その中の The Wide, Wide World（廣き廣き世界）のごときは、初版いでゝより僅か十年を出でずして、五萬部以上の賣行を見たといふ。アンナウォーナー一人の雅號は、Amy Lothrop といつた。彼女の讃美歌の中で、まづ最も多く人の知るものは、『けふをもおくりぬ』の一篇で、一八六九年、Bright Jewels（瑤玉）とよぶ日曜學校用讃美歌集に入りて、世に出でたものである。このうたの譜の作者 Robert Lowry の名を『さんびか』では、譜の名に用ゐてある。Robert Lowry は、人に知られた米國浸禮派の教職であるが、讃美歌の譜の作曲者として、更に世に聞え、『さんびか』第一編に六つ、第二編に二つ、其の作が載つて居る。第一編二〇八の『いかできよめん つみのこのみを』(Weeping will not save me)（一八六九年作）と同じく三〇三

の『うき世のなげきも こゝろにとめじ』(My life flows on in endless song)（一八六九年作）との二つは、歌も譜も共に彼の作である。『めぐみふかき 主のほか』(I need Thee every hour) の折返しの詞も、一八七二年この譜と一緒に、彼の筆より生れたのであつた。讃美歌作者として、作曲者として、當代に力と勢力とを延ぶると共に、一大學の教授としても、諸教會の牧師としても、劣らざる効績を擧げた。彼の歌や、譜は、當時日曜學校の讃美歌集や、合衆國中至る處で信仰復興運動の會合に、好みて一般に用ゐられたる福音唱歌式の多くの讃美歌集中に、同種類の外の作と一緒に收められた。

『めぐみふかき 主のほか』の歌の本體は、一八七二年四月に、これまた浸禮派の Annie Sherwood Hawks 夫人（一八三五—七二）の筆になり、同年の秋 Ohio の Cincinnati に開かれたる、浸禮派の日曜學校會議の折、初めて稱讃を博した。ホークス夫人は外にも讃美歌をかいたが、これに及ぶべき價値あり、人望あるもの

を出さなかつた。譜の如何が、どれ程讃美歌作者の名聲の基となるかといふ實例を、われらこゝにも見るのである。世界博覽會の催された一八九二年の夏、市俄古の、或る宗教の會合で、この譜の此の歌をきいて、D. W. Whittle 少佐は Moment by Moment の譜にて歌ふ、人の知る『ひとたびは、死にし身も』(さんびか第一編三〇七)をかいたといはれて居る。ホイットル少佐 Daniel Webster (一八四〇—一九〇二)は、一八六〇年より一八六五年に亘る南北戰爭中、北米合衆國の陸軍の將校をつとめ、後福音宣傳者となつて成功を收め、死に先だつ二、三年前スペインとの戰爭の際に陸軍附の牧師となつた。彼は少からぬ福音唱歌をかいた。作歌者の索引にても知らるゝ如く、『さんびか』にも數篇のつてゐる。

再びウォーナア女史に返つて『主われを愛す』につき、一言しよう。此の歌は一八五九年の作で、同年出版の小説 Say and Seal の内にでたものである。子供の歌として、これ程愛好さるゝものはない。譜は一八六二年 William Batchelder

Bradbury (一八一六—六八。本書第十六篇參照)が、一八六二年に作つたものである。同じ作者の歌で、もう一つ太西洋の兩岸に迎へられ、且飜譯されて、英語に親しまぬ國々にも歌はるゝものは、『さんびか』第二編一三三にある『うみ川野山』云々といふ、一八六〇年の作である。譜は英國一流の作曲者 Frederick Charles Maker (一八四四年生)の筆である。かれの曲譜は、近世の凡ての讃美歌集の内容を富ましし、『さんびか』第一、第二兩編にも五つのつて居る。即ち『さんびか』第一編六二、三七七、四一〇と、第二編一三三、一五一とで、この中第一にあげたのと、ウォーナア女史の歌詞の譜なる第四のとは、特に秀でたものである。メーカアは Bristol 市に住まひ、音樂教師と、作曲とを職とした。

ウォーナア女史は、讃美歌作者たる外に、讃美歌集の出版や、編纂にも關はつたが、その方面では忘れられて了つた。彼女の "Hymns of the Church Militant" (戰の教會の歌。一八五八年出版)と "Wayfaring Hymns" (旅の歌。一八六九年)も、

さる類のものとて、廢れてから餘程になる。

ウォーナア女史の『けふをもおくりぬ』と、同じ類に入れて然るべき基督教徒の奉仕の歌は、Katherine Hankey 女史の『いともかしこし　エスのめぐみ』(I love to tell the story) と、Anna Walker Coghill 夫人の『つとめいそしめ』(Work, for the night is coming) との二つである。前のは福音の物語の原理を概括して、『聞きたい話』『語られた話』とに更に分けて書いた長さ五十五節の詩中より、選んだものである。此の詩の出來たのは、一八六六年であるが、其の後種々の變更を經、作者自身も筆を加へたので、世に出でた形式も、一樣でない。飜譯の數も多く、今ある讃美歌の中では、一番譯の多いものであらう。日本譯のもとゝなつた本文は、米國の標準讃美歌のそれで、『選歌集』(The Selected English Hymns) にもある。ハンキー夫人の詩作の特徴は、人の知る如く、極めて表白の平易なことで、ために、わけても譯しやすく、また概して教會の基

礎を据ゑる時代に用ゐるに適切である。しかもその詩句は、何處にありても人の抱く魂の憧憬を表はし、之を解釋してゐる。此の作が、長く人氣を得てをるのも、そのためである。作者は英國の一銀行家の女で、一八四八年頃生れ、今なほ倫敦に住んで居られる。彼女の近い親戚に當る Lucy Neville 女史が、岐阜の英國々教會の宣教師であるのと、自分の讃美歌の賣高を、日本のある婦人傳道師の補助金にあてたといふ樣な事から、日本の基督教事業に細心なる興味をもつて居られる。

此の歌の譜は、一八六九年に、米人 William Gustavus Fischer（一八三五年生）が書いたものである。彼が音樂にふかい興味をもつて居る事は、世人の愛唱する無數の曲譜を作り、かつ音樂上の出版事業に關はり、又『さんびか』第一編八八と、同じく二七二の作曲者なる John Edgar Gould（一八二二—七五）と共に、樂器の取り扱ひ賣捌き等をしたのでもよくわかる。類が同じくて、人に知らるゝ

ことも等しい "Wondrous Love" (妙なる愛。さんびか第一編五九、三二五) の譜と、同編二六四の "Whiter than Snow" (雪よりも白く) の譜 (一八七二年作) とは、フィッシャアの筆になつたもので、彼が作曲者としての資格あり、人の心を獲べきものであることを、さらに立證して居る。

Anna Louisa (Walker) Coghill (一八三六—一九〇七) の『つとめいそしめ』が、『さんびか』第一、第二兩編にあるのは、蘇國の作曲者より、第二編のに用ゐてはどうかとて、自作の見事なる Hannam の譜を送り越されたからである。Lowell Mason (第三、第八兩篇參照) の Diligence (Work) の譜は、長い事、此の歌の譜として使ひ慣らされて來たもので、もう一つのは、一九〇九年に、此の歌を愛唱する蘇蘭土の人々が、Glasgow 寺院の、オルガニストなる Herbert Francis Raine Walton (一八六九年生) に請うてえた譜で、日本のに出でたのが、出版の始めである。コグヒル夫人は英國に生れたが、多年カナダに住ひ、此の歌も、カ

ナダで一八五四年に書いたので、其の著は詩ばかりでなく、散文もあつた。小說、小兒劇、傳記物一篇などがそれであるが、彼女の名を死なざらしめたものは、重に讃美歌である。

『わが主エスよ　ひたすら』といふ歌は、Elizabeth (Payson) Prentiss 夫人 (一八一八—七八) の非常に勝れた作である。なほ夫人は、一八六九年に "Stepping Heavenward" (天國へ) と題する興味深い、力ある小說を出だして、宗教文學の散文方面に著しい貢獻をなしたので、最も人に知られてゐる。併し一八六九年の作なる此の讃美歌も、今では却つて小說よりも、永久に作者を世に傳ふる堅實なる栞となつて居る。此の歌は、音律も、詩節末の疊句も、思想の開展し行く樣も、本書第八篇に既に述べた Sarah Flower Adams 夫人の "Nearer, my God, to Thee" (主よみもとに　ちかづかん) と、如何にも似通つて居る。然し基督教を語るものとして、明快にして力の籠れる點に於て人々の望むが如く後者に

勝つてをる。アダムス夫人は、ユニテリアン教徒であり、ブレンチス夫人は敬虔なる長老派の信徒で、Union 神學校の教授の妻であつた。ブレンチス夫人の歌の譜の作者 William Howard Doane（一八三一年生）の事は、本書第十五篇を參照されよ。

今迄論じ來つた歌と似通つた所のあるのは "To Thy Cross, dear Christ, I'm clinging"（こよなきめぐみの云々）の一篇で、作者 Flora (Best) Harris 夫人（一八五〇—一九〇九）は、日本のメソヂスト派の監督 M. C. Harris 氏の妻なりし人であつた。夫人の讃美歌の作はさまで多くなかつた。そして本書第十六篇に述べたる "Just as I am, without one plea"（いさをなきわれを　血をもてあがなひ）の作者 Charlotte Elliott の樣に、又火に鍛へた己が黃金を投じて、教會のたゝへ歌を豐かならしめたる他の人々の樣に、その背景にはいつも蒲柳の人の經驗が伴うて居る。夫人が世に遺したものに土佐日記の英譯と二卷の詩とがある。

『おもへばむかし　エスきみ』(I think when I read that sweet story of old) は、子供の歌で、一番よく人の知るものゝ一つ、いつの世にも傳はるべき佳作といふ事が出來る。この歌の作者 Jemima Thompson, 後の Luke 夫人（一八一三—一九〇六）の筆からは、これ以外の讃美歌は生れなかつた。これは夫人が一八四一年、英國旅行中驛馬車の中で書いたので、譜のもとゝなつたのは、彼女が少し前にきいた希臘の物らしい。その曲譜で歌ふ讃美歌を欲しいと思ひつゝも得られなかつので、車上て古封筒の裏に書いたのである。彼女の父は日曜學校長であつたが、ある日曜日の朝これを知りえたのである。其の次第は、普通の學校でそれを敎へられた子供等が、あの歌を歌はして下さいといつたからで、校長は歌をきいて、ことにそれが自分の娘の作であると知つて、多大の興味を感じ、直に日曜學校の雜誌に載せた。それより漸次人心をうるの道を開いて、今日に及んだのである。作者は幼少の頃より、印度に宣教師たらんと願つて居たが、病を

得て素志を遂げられなかつたといふ。遂に會衆派の牧師なる人に嫁して、多年宗教雜誌の經營に關はつて居た。

『さんびか』にある『おもへばむかし』の譜は、タムソンの心を引いたといふギリシヤの譜に、著しく似て居る。今の或る讃美歌集には元の曲譜の諧調を整へて、ギリシヤの曲譜の修正である事が見易い樣に、Balamis といふギリシヤ名をつけてある。さう見なさないと、此の譜の起源は、全く分らなくなるのである。この歌は近頃、西洋諸國の家庭團欒のむしろに、よく用ゐらるゝやうになつた。

此の歌のもう一つの譜の Davenant は、英國詩人であり、戲曲作者である Sir William Davenant（一六〇五—六八）として、かの名高き Ben Jonson の後を襲うて、欽定詩人となつた人の名を附したものである。彼は政治の上では、王黨であつたため、入獄、追放等、政界の苦難を嘗めた事もあれば、時には政治上の

好遇をもうけて、チャールス一世よりナイトに列せられた事もある。さらに此の譜は "O believe me if all those endearing young charms" で始まる Tom. Moore の歌の譜にも用ゐられたもので、二百餘年を經たるものなるは明かである。

第五十六

『ゆき来もしげき　冬にさきだち』"Come, ye thankful people, come"
（さんびか第壹編三七八・選歌集三二六）

『すゝめすゝめ　こゑあはせ』"Forward! be our watchword"
（さんびか第貳編二一三・選歌集二八七）

『よろこびうたへ　めぐみの主を』"Sing to the Lord of Harvest"
（さんびか第壹編三七五）

『あいのみかみよ　みまへにたつ』"O love Divine and tender"
（さんびか第壹編三七九・古今一四八・選歌集三三一）

『ちからのかぎりに　すゝみてたゝかへ』
"Fight the good fight with all thy might"
（さんびか第貳編二二三・選歌集二九五）

『われらたがへし　たねをまけど』"We plough the fields, and scatter"
（さんびか第壹編三七四・古今一八七・選歌集三二八）

『主はわがかひぬし　われそのひつじ』"The King of Love my Shepherd is"
（さんびか第壹編二二九・選歌集二〇二）

『エスよこの日　かみのたみは』"O Jesus, God and Man"
（さんびか第貳編一一）

英國々教會の教職として、又英文聖書註解者の先進として、前世紀の後半に其人ありと知られた神學博士 Rev. Henry Alford（一八一〇—一八七一）の名歌が、一首づゝ『さんびか』第一、第二、兩編に收めてある。作者は晩年十四年間、Canterbury 大寺院の Dean なりしより、Dean Alford とよばれた。その手になつた希臘文新約全書の註解は、二十餘年の勞作の結果で、斯界に於ける彼の大著作であり、半世紀に亘つて幾多の神學研究者の必讀書であつた。彼は他方面の文學にも、その健筆を染め、かの廣く讀まれた Contemporary Review（現代評

論）の編輯もした。ケムブリッヂ大學を卒へたのは一八三二年であるが、學生の頃から、彼は造詣深き人として、認められて居た。一八一四年には、該大學の其の年の Hulsean 講演者たるの榮譽を擔うた。

茲に掲げた代表的の二篇は、當時の優秀な讃美歌中に數へられ、且つ長く諸教會の信徒らに愛吟さるゝものと思はれる。實際いづれの基督信徒も、此の二篇を實と視てゐるが、說教者として、又聖書註解者としての彼と比較すれば、讃美歌作者としては遜色あるを免れまい。彼はまた聖歌集を編纂した。それはキーブル、ウォーヅウォールス（第五、第四十二兩篇參照）などの集のやうに、四季をり〳〵の禮拜に用ゐるものである。これは彼が僅か廿六歲の時の編纂であるから數に於て誇るべきものはないが、彼の創作、譯詩、數篇を收めてある。彼自らは國教徒であつたが、英國々教會以外の教會員に對する彼平生の態度は、よくその特徵を示してゐる。かの所謂非國教徒に對して禮節の厚かつた事は、

己の補助牧師となる人を求むる時の要件に、一に基督を人に說き、又教ふる人で、教派を主位におかない人であるべき事、又非國教徒であつても、敬虔な人ならば基督に於ける同胞で、教會員といふ點からは、己れと些かも優劣のない者だといふ事を能く心得て居る人でありたい、といつた言葉でも、察しえらるるであらう。Reverend の稱號を國教以外の教職に用ゐるを禁止する法令を制定せんとした Wordsworth 監督（本書第四十二篇參照）の態度と、アルフォードの此の態度とは何といふ相違であらう。

英國の習慣や、禮節から見てほむべき事ではないが、アルフォードは家にある時は、靴下も靴もはかず、外出の時は素足に靴を穿つたといふ奇僻家で、生前己が碑文を月日と姓名の外、皆羅典語で『エルサレムへ志す旅人の宿』と認めておいたといふ。

上にあげた第二の名作、進行歌は、一八七一年の六月に行はるゝ Canterbury

大寺院を中心とせる教區の唱歌隊の祝賀のために書いたので、作者の死に先だつ幾何もない頃のものであらう。彼は會のまへ、其の年一月十二日に世をさつた。原作は一節八行に四行づゝの折返しのついた八節から成る、可成りの長編で、一節十二行全詩九十六行になる。かの大寺院の樣に長い行列の餘地のある集會場でゝもなくては、此の歌全部を用ゐる事はとてもできない。幸ひ Canterbury の建物は、さうした類のものであつた。唱歌隊がこゝに始めて、此の歌を歌つた時、言語の及ばぬほど目覺しく、尊かつたかと人は傳へてゐる。

光眩い火の柱をたゝへてゐる、此の讃美歌は、その光につゝまれて輝いて居る。『イスラエルの子孫に言ひて進み行かしめよ』（出埃及記十四〇十五）との我等の熟知せる聖句より出でた歌である。

アルフォードの他の作、收穫の歌は、五十六行九節に過ぎないが、常に用ゐるものとしては、長すぎる嫌があつた。此の歌は一八四四年に、作者自身の編

纂した書中に現はれ、其の後轉載される毎に、種々變更されて、つひに英米の標準讃美歌のどれにも編入さるゝに至つた。收穫の歌としてふさはしい讃美歌は、實に數に於て乏しかつた。これが確にアルフォードの歌を成功せしめた一つの所以となつたのであるが、又その歌が値なきものであつたなら、どうして今日の樣に廣く用ゐらるゝ事がありえよう。

『ゆきえもしげき　冬にさきだち』(Come, ye thankful people, come) の歌に、アルフォードの自作の譜があつたが、それは用ゐらるゝに至らなかつた。今其の譜として一般に用ゐられてゐる St. George の譜は、音樂博士 G. J. Elvey（第四十九、五十兩篇參照）の作で、英文讃美歌として、優秀な "Hymns Ancient and Modern" に此の歌が編入された時の譜として、一八六八年に書かれたものである。『すゝめすゝめ　こゑあはせ』(Forward! be our watchword) の譜の原曲 St. Albans は、Franz Joseph Haydn（第十七、十八兩篇參照）のもので、Baring Gould

の、『みよや玄ふじの　旗高し』(Onward, Christian soldiers) の歌にもあふので、Sullivan (第七篇參照) の譜 St. Gertrude に代へて歌はるゝ事もある。

デーン、アルフォードと同時代の作者で、又『さんびか』中の收穫の歌を物した、法學博士 Rev. John Samuel Bewley Monsell (一八一一—一八七五) も、基督教讃美歌として愛吟さるゝ集を出だした。收穫の歌 "Sing to the Lord of Harvest" (よろこびうたへ　めぐみの主を) (さんびか第一編三七五) は、"Hymns of Love and Praise for the Christian Year" の第二版に、一八六六年始めて收められた。併しモンスルの名をさらに高からしめたものは、『さんびか』第一編三七九に譯出された結婚の歌と『さんびか』第二編二二三の靈の戰の歌、『ちからのかぎりにすゝみてたゝかへ』(Fight the good fight with all thy might) の二篇である。後者が特に世人に愛誦せられたのは、英國の南亞弗利加戰爭の折と、Cuba と、Philippines との問題で、米西戰爭のあつた際である。これ一八六三年、即ち之

を載せた上述の聖歌集が初めて出版された年に出來たのである。此の歌はどの聖歌作者の作と見ても、充分の價値を有し、英米の諸教會にて贏ちえた名聲を失する惧は決してない。

モンスルは、愛蘭土の牧師館に生れ、其處に生ひ立ち、Dublin の Trinity College に學んだ。國教徒であつた彼は、始め愛蘭土に住まつて居たが、奇禍に逢つて英國に其の命を終つた、それはかれが牧師となつて居た會堂の修繕中、或日集會場に立つて、折しも屋根の上でしてゐる工事を見上げて居た際、石の一片がずれて彼の頭上に墜ちた。そして彼は幾程もなく落命した。

英語の讃美歌作者として彼が一流に位する所以は、宗教心の深かりしと、精神の比類なき優しさと、正鵠をえたる叙情性との特徴があるからで、三百篇に及ぶ彼の讃美歌は、おしなべて『光にみち、温味があり又信念に富んでゐる』と評せられ、それを歌ふ人々の心に、一層崇拜の情を示し、深うするものなる

を思はしめる。他の多産的な作者と同じく、彼の作にはむらが多い。從つて永久的の作は比較的に少ない。

モンスルの收穫の歌に用ゐる Caskey の譜を草した Theodore Edson Perkins（一八三一）は、米國の人で、特に日曜學校用にふさはしい歌曲作家として、注意すべき人である。歌を敎へ、又唱歌隊の一人としても、合唱隊の指揮者としても、其の名を知られた。筆者がなほ Princeton 大學に在つた時、音樂倶樂部（Glee Club）の練習のために、彼が一度大學を訪づれた事を記憶して居る。音樂博士 Samuel Sebastian Wesley（一八一〇—七六）の作で、モンスルの結婚の歌に合せた Aurelia の譜の事は、本書第四篇に既に之を論じた。

『ちからのかぎりに　すゝみてたゝかへ』（Fight the good fight with all thy might）の譜 Penteost は、一八六八年 Rev. William Boyd（一八四七—）の筆になつた。此の歌の譜となつたものゝ中で、最も愛唱されてゐる。ボイドは、

Jamaica に生れ、Oxford 大學を卒業し、英國々敎會の敎職となつた。

さらに十八世紀に溯れば、收穫の歌を物した人に Matthias Claudius とよぶ獨逸人がある。彼は學者にして、又記者であつた。一七四〇年に生れ、ナポレオンが Waterloo に敗戰した一八一五年に世をさつた。蘇國の Jane M. Campbell 女史（一八一七—七八）が一八六一年に獨逸文 "Wir pflügen und wir streuen" を譯して "We plough the fields and scatter"（われらたがへし　たねをまけど）の歌となした。

原作は、Paul Fürdman's Fest（パウルヒドマンスの祝ひ）とよぶ散文小品中の、『農夫の歌』（The Peasants Song）と題する詩の一部である。パウルといふ男の家に、祭の季節に近所の人達が寄つて、歌つてゐるといふ事にして書いたものである。つひに讃美歌として、之が用ゐらるゝ樣になつたのは、詞がそれにふさはしいからで、獨逸語の種々の讃美歌集に容れられ、延いて英文に譯された。

クロウヂウスは獨逸の牧師の子として、宗教々育を受けながら、友なる詩人ゲーテによつて、力强く代表された當時勢力のあつた純理論の影響をうけた。併し又もその反動に依つて、熱心に信仰を標榜して筆を揮つたといふ面白い經歷の人である。爽快にして人を樂しましめ、且人を刺す彼の才筆は、正統派の信仰の味方として、强い廣い影響を及ぼした。

此の歌と譜とは、一八〇〇年出版の獨逸公立學校用歌集に同時に現はれた。此の譜は一八四七年、英國では外の歌詞に合せて用ゐられた事もあるが、一八六一年にはそこでもキャンベル女史の此の歌と譯と結ばるゝ樣になつた。調はもと伊太利より出でたものといふ事であるが、その今の姿は Johann Abraham Peter Schulz（一七四七—一八〇〇）の作である。シュルツは獨逸の田舍の、貧しい家に人と成つた。苦しい中からも、音樂を學び、遂に其の道に秀でゝ、プロシアの皇室附禮拜堂の樂師となり、又丁抹の皇室附禮拜堂の樂師となつて、丁抹

の音樂の發展に甚大なる影響を與へた。彼は宗教の歌、其他の獨逸の歌を集めたもの數卷を編纂し、出版した。

こゝに看過し難い他の作家、從男爵 Rev. Sir Henry Williams Baker（一八二一—七七）を紹介したい。彼も收穫の歌をよんだが、それは廣く用ゐらるゝに至らず、又讃美歌にも容れられなかつたが、組織的聖歌學界に於ける彼の名は、異彩を放つて居る。これは作歌者、作曲者を兼ねたがためでもあるが、わけても聖歌集編輯者間に、彼が占めて居た位置がしからしめたのである。彼は "Hymns Ancient and Modern" の編輯委員なる、英國教會の牧師四十人中の議長であり、また此の目覺ましい成功を博した聖歌集を永久の記念碑としたあの運動の主腦であつた。此の歌集が今日用ゐらるゝ範圍は、英國及び Wales の諸監督教會の四分の三を下らない。蘇格蘭土、愛蘭土、及び英國殖民地の諸教會にも、殆んど採用され、海陸軍の宗教禮拜にも用ゐらるゝがため、更にも顯

著なものとなつた。英語の行き渡れる國民中に、初版以來五千萬部以上販賣せられたのも、まことに故ある事で、日本の聖歌集中獨り『さんびか』に匹敵するもので、本書に屢々引合にいだした『古今聖歌集』は此の英語聖歌集を模範として、其名も之に倣つたものである。一八五七年に此の大聖歌集を產出せしむるに至らしめた運動が、倫敦の郊外に起つた當時、英國の敎會に用ゐられて居た讃美歌集は、三百餘種に及んだ。今それがその跡を絕つに至つたのは、此の歌集が優逸であるのと、內容が其の名に背かないといふ點にある。前の三百種の聖歌集の樣に Watts, Wesley, Cowper, Montgomery 等、近代の作家の讃美歌や、當時廣く用ゐられて居たダビデの詩篇の歌の外に、基督敎歷史の初代のもので、保存されては來たが、實際には看過されて居た拉甸、希臘の歌なども選出されて、Neale, Caswell, Baker の如き詩人にして、語學者なる人々の手に、滿足に飜譯されて、今の世に適するものとせられた。此の書の目的は、上に述

べた如くであるが、啻に英國敎會のみならず、現今のあらゆる敎會の禮拜の內容を富ました。誠意、此の計畫に當つた編輯長が、此の發展に大功あることは思ひがけからぬ。編輯者達は、己が敎會以外二、三十の敎會に用ゐらるゝであらうくらゐに思つて居たにすぎなかつたが、實際は遙かにそれを超えた。Baker は英國の海軍將校の子、一八二一年に生れ、ケムブリッヂに學んだ。敎職となつて Herefordshire の敎會を牧し、一八七七年死に至る迄の二十六年に亘つて、其の職をつゞけた。讃美歌作者としての事業は、廣くはなかつたが、原作、飜譯何れも第一位を下らなかつた。第二位の作を出すには、彼の趣味は餘りに高く、精練されすぎて居た。言語の極めて單純なること、音律の滑かなこと、詞に偉なる熱誠が籠つて居ることなどが、作者としての特徵である。彼の作中の白眉はこゝにかゝげた二篇の初めのものであらう。彼と共に編纂委員の一人であつた John Ellerton（第二十三篇參照）は、之を評して、詩篇第廿三篇を歌にした

ものは無數であるが、その中最も美しいものであるといつた。蘇格蘭土を除いて大方の信者は、此の評に首肯する事であらう。

Perverse and foolish oft I strayed;
But yet in love He sought me
And on his shoulders gently laid
And home rejoicing brought me

わがたましひをば　いのちにかへし
たゞしきみちにぞ　ともなひたまふ

此の美はしい讃美歌の句が、彼の臨終の詞であつたといふ事は、興深い事である。此の歌は一八六八年にでた "Hymns Ancient and Modern" の增補中に初めて現はれた。Dykes 博士（第四篇參照）の Dominus regit me といふ今の譜も、又同年の作で同じ書に載つたものである。

ベーカアの第二の歌は、一八五二年に出版された。若い時の作であるといふ外にいふべき事はない。併しそれに用ゐらるゝ譜は、音樂の大家哲學博士 Robert Schuman（一八一〇—五六）の物したものである。シュウマンは世界史の、高名なる偉人中、まゝ見る如く、精神錯亂の悲境に陷入つて自殺を圖つた事もあるが、つひに狂死した。病に襲はるゝ以前に、樂界に貢獻した所は、大なるもので、名聲を贏ちえたる聲樂曲、洋琴曲の作者としてのみならず、音樂雜誌の記者として、又 Wagner, Chopin, Brahms 等の現時代を來らした音樂上の改革を標榜して居つた。彼は『作曲家中の音樂の最高批評家、音樂批評家中の最大作曲家』といはれてゐる。ピアニストとして月桂冠を得んとの彼の志望は、片手を損つたゝめに、水泡に歸したが、此の不幸は彼をして音樂の創作の方面に拔んでしめた。

かくして世を益する事更に大いに、更に永久的であつた事は確かである。シ

ュウマンは、名高い Leipzig の音樂院の教授でもあつた。『さんびか』中此の光彩ある名を蒙らしめうる譜が二つある。『さんびか』第一編四十六の Canonbury の譜と、同第二編のベーカアの歌の譜とで、編輯者は後のに作曲者の名を與へて居る。シュウマンは特に讃美歌の譜の作者ではなかつたゝめ、以上は、人のこれを整調したものである。シュウマンは書肆の子で、將來辯護士たるにふさはしい教育をうけたのであつた。彼の妻となつた婦人は、ピアニストで、夫の作曲の熱心な解釋者となつて、當時の歐洲諸國の音樂社會に、其の影響を深からしめた。

第五十七・五十八

『きみのきみにます　おほきみェスを』
"Hark! ten thousand harps and voices"
（さんびか第壹編九八・古今四〇八・選歌集一〇九）

『世はみな惡魔と　かはらばかはれ』
"Zion stands with walls surrounded"
（さんびか第壹編一三四）

『わが御神よ　よるもひるも』"Still, still with Thee, my God"
（さんびか第壹編五）

『ゆふべのいのり　いまははて丶』"Hushed was the evening hymn"
（さんびか第壹編四一二・選歌集三三六）

『たふときわが友　エスキリストは』"What a Friend we have in Jesus"
（さんびか第壹編二四三・古今三九〇・選歌集二四二）

『しづけきいのりの　ときはいとたのし』
"Sweet hour of prayer, sweet hour of prayer"
（さんびか第壹編二三八・古今三八三・選歌集二四一）

『つかれしこゝろを　なぐさむる愛よ』"O Love that will not let me go"
（さんびか第貳編一五六・選歌集二二九）

Thomas Kelly（一七六九―一八五四）は、愛蘭土の優秀な讃美歌作者として、聖歌界に傑出せる人で、前世紀の前半に彼の出だした讃美歌の數は、七百六十七篇の多きに上つた。出來といふ方からは、Watts（第十二篇參照）に比肩すべくもないが、數に於ては、彼を凌いで居る。國教會で按手禮をうけ、初めの程は、該教會に關係を持つて居たが、後國教を非とする傳道者となつた。彼の初期の說教は、熱烈な福音主義のものであつた。それが當時國教會に行はれてゐた神學と相容れない所から、教會の當局者たちに疎まれ、愛蘭土の主教なるDublinの大僧正は、彼がその地方の英國教會の教壇にたつを禁じた。それで彼は友人

Rowland Hillと共に、そこを去つて、獨立教團に身を投じた。富裕なる彼は、會衆の集會所を建設するために、惜しむ事なくその財を投じた。父なる人は從男爵で、愛蘭土法廷の裁判官であつて、その子に法律を學ばせた。それでケリーが實際辯護士となつて、光明ある前途を持つて居たといふのは、看過すべき事でない。さあれ彼本來の志は、法律よりも神學に向いて居たので、結句その道をとつて二十三歳の時聖職を授かり、爾後八十餘歳に達するまで、ながい生涯を說教者として送つた。彼の著しい特性の一つは、いつも神に近いといふ事で、臨終の際に、其の唇頭に上つたといふ言葉にても、窺はれるのである。枕邊に侍して居た一人が、詩篇第二十三篇の冒頭の『エホバはわが牧者なり』を誦じたところ、直にそれを敷衍して、『主はわが凡てなり』といつた。

茲にあぐるケリーの筆に成つた二篇の讃美歌は、共に、作者自らが編纂した數ある讃美歌集中の一に、それがのつて世に出た年、即ち一八〇三年の作で、前

の歌は『さんびか』と『古今』とにある『共通』の歌である。二つながら、英語のまゝで廣く流布し、普通に合せ歌はるゝ譜の作られた米國では、わけても愛誦された。始めの Harwell とよぶ譜は、一八四〇年 Lowell Mason（第八篇參照）が作曲せしもの、第二の Hastings の譜は、本書第四十二篇に論じた作歌者にして作曲者なる Hastings の作である。"Hark! ten thousand harps and voices"『きみのきみにます　おほきみエスを』の末句ハレルヤは、ケリーの原作に、メイスンが附け加へたものであるが、とう〳〵離しがたいものとなつてしまつた。『神の使者は、皆これに跪くべし』（ヘルブ書一〇六）が、此の歌のもとゝなつた聖句で "Zion stands with hills surrounded"『世は皆惡魔と　變らば變れ』は、詩篇第一二五篇二節に基き、キリストの敎會の確乎たる安泰を、語氣を強めて詠じたものである。

ケリーは、讃美歌作者であり編纂者であると同時に、相當な音樂者で、譜を

も作つたが、その譜は餘程以前の讃美歌集にのつた丈で、今では用ゐられない。その歌全部を載せた一八五三年出版の最近の編輯書の序文の文句に、キリスト敎の根本的眞理を擁護する態度の確乎たるを窺ひ知ることが出來る。彼は斯うかいて居る。『玆に載せた讃美歌の最初のものと、最終のものとの間には、約六十年のへだゝりがあるけれども、何れも同じ大なる眞理を、同じ樣に談つて居る』と。かゝる長日月の間に、作者が見聞した事も多かつた。併しその爲に福音の大眞理に對して、心をかへる事は毫もなかつた。往時良心を安靜ならしめたものは、今日もやはり同じことで、過去に希望を與へたものは、現在もさうであつた。『そは据ゑ給ひし基礎の外に、誰も基礎を据うること能はざればなり。此の基礎は即ちイエス・キリストなり』（コリント前書三〇十一）。たゞもう『新思想』を迎ふるに忙がしい今日においても、このキリスト敎徒の經驗は一つの貴い證であらう。

James Drummond Burns（一八二三―六四）も、亦『さんびか』に貢獻するに、二つの歌をもつてした。第一編五の『わが御神よ　よるもひるも』(Still, still with Thee, my God) と、同じく四一二の『ゆふべのいのり　いまははて丶』(Hushed was the evening hymn) とである。

作者は子供の歌として、以上の歌をかいた。思想の美と辭句の平易とは、宗教的情操の深さと相合うて、それにいかにも適して居る。此らの種々の點で、此の二つの歌は、C. F. Alexander 夫人（第二十九篇參照）の讃美歌の、最も勝れたものと匹敵し、近代の凡ての讃美歌集中、此の種のうちで、秀でたものとされて居る。わけても一八五六年にかいた夕べの歌は、めでたい作で、翌年外の歌と一緒に、作者が出版した原作の小集に載つたものである。

Burns は蘇國の人、長老派に屬して本書第二十一篇に述べた蘇國教會大分裂の當時、聖職につき、自由教會に屬して、該教の或る教區で數年間、牧師として活動した。併し健康を損うて職を辭し、亞弗利加西岸のかなた Madeira 島に病を養ひ、そこの公教會に牧師たること五年にして、北方に歸還するも差支なきを思うて、さつて倫敦の牧師となり、九年に亘つて熱心に努めたが、又も、英國より更に温暖なる土地が、其の健康に必要となつたので、Henry Francis Lyte（第二篇參照）と同じく、彼も佛國の南なる Reviera へ行つたが、そこで一八六四年、僅か四十二歳で肺患に仆れた。

バアンスが詩才の人であつたことは、疑を入る丶餘もない。獨逸語から譯したのも、大分あるが、九十篇乃至百篇のかれの讃美歌は、それが花と咲きいでたものに外ならない。彼の出版になつたもの丶中に、月の三十一日、一日づ丶にあてた自作の夕べの歌とそれに祈禱を附した一卷がある。

此の短かい記事から想像するに、此の蘇國の歌人の一生は、まづ苦痛と患難との生涯であつた。歌ふ小鳥の中でも、美聲たぐひなき鶯は『茨に胸をおしあ

て丶『歌ふと、詩人のいひしにも似たる一生であつた。

此の二つの譜に用ゐらる丶 Franconia と Samuel との譜の、後のは Sir Arthur Sullivan（第七篇參照）の作、前のは Johann George Ebeling（一六二〇—一六七六）とて、讃美歌の作曲者として、當時其の名を知られた獨人の作である。彼の書いた多くの譜は、實質的に獨逸教會を富ました。又彼は伯林のある新教々會の音樂指揮者となり、晩年には Stettin 市の Carolinen ジムナシムの音樂教授となつた。

"What a Friend we have in Jesus"（たふときわが友 イエスキリストは）位廣く出版されて、屢々歌はれた讃美歌は少ない。原作は一八五〇年に既に書かれたものであるといふ。作者は愛蘭土生れの加奈陀人なる Joseph Scriven である。彼は一八二〇年 Dublin に生れ、そこの Trinity College に教育をうけ、廿五歳の時加奈陀に移住し、一八八六年死に至る迄、そこに過ごした。彼は本書第九、十兩篇に述べた Anne Steele 女史と同じく、愛人離別の苦を味つた。そ

れは久しからずして、結婚する筈の婦人が、料らずも溺死した事であつた。此の悲しい出來事は、彼をして生命財産を擧げて、キリスト信徒の奉仕に心から己を聖別するに至らしめた。教育あり、教養ある人ながら、割合に下級の道程を甘んじて行つた人で、身を挺し、手を下して、人を雇ふに資なき人々のために、その希ふ所をなした。或は鋸をとり斧を携へて、貧にして賴るものなき寡婦のために多量の薪をきりなどした。然し裕福なる人の財布は、このために彼の手を煩はすことができなかつた。筆を執つて自己を表現する彼の力は『ある悲嘆にくれてゐた母を慰めるために』書いたのだといふ此の一つの讃美歌をかりて、其の實を示して居るものと思ふ。此の歌のうつしが、後年近くに住んで居る友人の手に這入り、其の紹介で、日の眼を見るに至つた。然しそれが始めて出版になつたのは、日曜學校の歌を幾つかのせた餘り知れない紙表紙の、ほんの一時的な小冊子に於てゞある。I. D. Sankey 氏が『福音唱歌』第一編を

出版する時、此の一部を見出でゝ、直に新しい書物の序文にそれを用ゐた。これによつて、此の歌は急速に廣く知られ、一般世人に愛好さるゝやうになつた。法學博士 Charles Crozat Converse（一八三二年）の之れにつけた譜が、實際からいつてかゝる効果を收めしむるに、與つて力あることはいふ迄もない。コンヴァスは米國人であり、名高い法律家であつた。彼は歐洲でも音樂教育を受け、敬重すべき作曲者となつて、宗教音樂及び其の他の曲を作つた。彼の管絃合奏用のものは、眞に價値あるもので、世は五十年前に彼の樂才を認めた。併し彼の最も裨益ありし所以は、此の一つの讃美歌の譜によるといつていゝ。

『しづけき祈禱の』（Sweet hour of prayer）も、今論評した歌と同じく『共通』の歌の部にはひつて居るので、こゝに記さう。一八四九年 The New York Observer といふ宗教雜誌にこれが始めてのつた時以後、西洋、殊に米國では、長い事もて囃されたものである。北米合衆國に遊んだ或る英國の教師が、此の雜誌に送

り來つたもので、作者は William W. Walford といふ英人で、失明牧師であるといふ。作曲の年代はよく分らない。併し一八四二年頃とされてゐる。基督信徒が神との交りを涵養し、發展させて果實を結び行く事の記錄と並んでは、些々たる起源の如きは、語るに足りないのである。實際此の歌は昔ほどには人が歌はないが、今述べた方面に用立つものは、に之を措いて他に求むべくもない。

Sweet Hour といふ譜は、一八五九年 William B. Bradbury の作曲したものである。ブラドベリーの事は本書第十六篇に之をのべた。なほ起源の事をいつて見ると、Fanny Crosby 即ち Van Alstyne 夫人（第十六篇參照）の塲合、及び『さんびか』第二編一五六の "O Love that will not let me go"（つかれしこゝろをなぐさむる愛よ）の作者 Rev. George Matheson の塲合に働いた攝理も、Sweet Hour を成らしめたそれも、ほゞ同じものである。マセソンの事は、前章に略述したが、さらにこゝに記す價値がある。彼は蘇國の人で、長老派の牧師として

よく名の聞えた人である。それは一つには、壯年期の始めから、全く失明の苦を嘗め通したといふためでもあるが、此の事實を外にしても、其の說敎の目覺しさと、概して聖職者として敏腕家なりし事などからも、又非凡なる人であつた。彼は幾年となく蘇國の首都の、最も勝れた一敎會で、牧會の任務に當つて居た。そこでかれは音聲を以て、又は筆を執つて、蘇國の國敎徒の第一流の人々にも比しうべきほどの、智的及び精神的の勢力を振うた。彼は重に說敎集の姿で、何卷かを公にした。その勢力とは、蘇國初代の人々の特徵であつたものほど嚴格でなく、より近代的な神學の標式のものであつた。それは彼の、この優れた歌の初めの行に見られる。即ち彼が力說したのは、神の律法に非ずして、神の愛であつた。そして裕に此の兩者の權衡を保つて過らなかつた。

マセソンの讃美歌の譜 Margaret は、音樂博士 Albert Lister Peace（一八四四—一九一二）の作である。ピースは英國のオルガニストで、宗敎歌曲集の作曲者で、

又出版者であつた。獨修に依つて音樂の名手となり、遂には Glasgow 寺院や、Liverpool の町會所の、オルガニストの如き、顯要な職を帶びた。その名譽博士號は Oxford 大學より贈られたものである。

第五十九・六十

『めぐみのいづみよ　たえずわきいで』
"Come, Thou Fount of every blessing"
（さんびか第壹編一六五・古今二八二・選歌集二四七）

『かみによりて　いつくしめる』"Blest be the tie that binds"
（さんびか第壹編三二三・古今二一〇・選歌集二九九）

『主のしめしにより　あたへられし』"How precious is the Book Divine"
（さんびか第壹編一二三・選歌集一二八）

『かみよみめぐみを　われにそゝぎ』"Lord, dismiss us with Thy blessing"
（さんびか第壹編三三・古今七五・選歌集三二）

『すくひぬしエスよ　このゆふぐれに』
"Saviour, breathe an evening blessing"
（さんびか第壹編六・選歌集一八）

『エスよこゝろにやどりて　われをみやとなしたまへ』
"Lord Jesus, I long to be perfectly whole"
（さんびか第壹編二六四・古今三五一・選歌集二六五）

『ゆきてはかへらぬ　つきひのながれ』"My days are gliding swiftly by"
（さんびか第壹編三四五・選歌集三一六）

『はるかにあふぎみる　かゞやきのみくにゝ』
"There's a land that is fairer than day"
（さんびか第壹編三五七・古今三七六・選歌集三一八）

『いつくしみふかき　主のてにひかれて』
"He leadeth me, O blessed thought"
（さんびか第壹編二二三・古今三二七・選歌集二〇一）

『かみともにいまして　ゆくみちをまもり』
"God be with you till we meet again"
（さんびか第壹編三九二・古今二一二・選歌集三三二）

本書既に種々の歌を評し去つた。こゝに殘る所は男性作者の筆に成つたもの

で、多かれ少かれ基督教徒に愛誦されてゐる歌のみである。先づ此の篇に擧ぐべきは Robert Robinson の『めぐみのいづみよ　たえずわきいで』である。これは題詞の示す通り、基督教徒に心靈上の利益を與へて來た歌として、一般に愛誦されてゐる。作者は僅に二十三の年に此の歌を作つた。後年旅行し、乘合馬車で、一婦人と道伴れになつたが、その婦人は作者の言語動作を注目して、遂に作者を輕佻浮薄の徒となし、公然彼を非難し且つ一片の忠言を與へ、此の歌の一二節を誦して、この一首の歌で、彼女が平素大なる慰めと助とを得て來たと語り聞かせた。勿論この婦人は、對話者の談話から、彼が宗教上の事柄にも通じてゐる位のことは知つたらうが、此の對話者が即ちこの歌の作者であるとは夢さら知らなかつた。當の作者にむかつてのこの忠言空しからず、彼は忽ち悔悟の意を示して『婦人よ、私はその歌の作者です、然し今の我が身には、何等の幸福もない、曾てその歌を作つた頃の幸福なる感情を再び懷くことが出來

るなら、私は何物をも之が爲に擲ちませうに』と嘆じたといふ。

ロビンソンは、一個の信者として、又一教職として、カルヴィン派のメソヂスト教徒であつた。初め彼は Wesley の友であつた Whitfield の說教を聽いて悔い改めた。種々變化の多い生涯を送つた人で、或は會衆派に或は浸禮派に、又或時はメソヂスト派に屬し、又或人の說によると、監督教會にも、さてはユニテリアン派にも屬したとのことであるが、此の說に對しては、別に確乎たる證據はない。彼は一七三五年に生れ、五十六歲にして一七九〇年に死んだ。彼は卑賤に生れ、幼時父を失ひ、ロンドン市內の某理髮師の徒弟となつて、數年其の業に從事してゐたが、偶々ホイットフィールドの感化により、遂に宗教的の生涯を送るにいたつた。その筆に成つた讃美歌は、僅に一二首に過ぎぬが、散文を以て、神學上の問題又は正統派の信仰辯護論を著述した。當時彼が名聲の高かつたのも、一半はこれが爲であつた。

『めぐみのいづみよ　たえずわきいで』は、早く一七五九年に作られ、同年一卷の英語歌集中に收められて出版された。其の歌集の一部は、現に米國の Drew 神學校の圖書館に保存されて在る。併し一七五八年には、既に此の歌の存在したことを手書體の文書が、證明してゐる故に、事實此の歌は一七五八年の作と、今では一般に信ぜられてゐる。

此の歌には、通常 Nettleton と稱する譜を用ゐてゐる。少くとも此の歌の本國アメリカではさうである。作曲者は、John Wyeth（一七九二—一八五八）といつて、ボストンの生れで、音樂書を發行し、讃美歌集を編纂した人である。其の編纂した歌集には、自己の名を冠らせてゐる。併し此の譜は明治三十四年『共通』讃美歌委員會で『めぐみのいづみよ』に對して、やゝ合はぬといはれたので、MacNair 夫人の作曲 Blessing を此の歌の正譜とし、Nettleton を副譜とする事になつた。

『かみによりて　いつくしめる』は、John Fawcett（一七三九—一八一七）の筆に成つたもので、神聖なる同胞主義を歌うた點に於て、無二の歌である、これは上なき愛情と、キリスト教徒の獻身とより、溢れ出でた作である。作者は英國浸禮教會の教職で、Yorkshire 州 Wainsgate の微々たる一教會の牧師であつた。家族は增加するが、貧しい教會では相當の支給をする事が出事ぬので、已むを得ずロンドンの然るべき一協會よりの招聘に應ずるを自己の義務とも思ひ、又その協會に就任すれば、手腕を揮うて一層有益に活動し得るとおもつた。されば彼はウェーンスゲートに於て、既に告別の說教をもすまし、家財什器を荷車に積み、最後の別れを告げようとした。然るにふと傍を見れば、失望落膽した教會友等が、此の良教師と別るゝことなからしめ給へと神に祈り、聲涙共に下つてゐた。この光景を目にした彼は、心を更め、永く此の教會に留まることにした。教會友が斯くも牧師を慕ひ、其の留任を望んだのは、勿論正當であつたら

うが、牧師の俸給を增さんともせず、又さうする力もなかつたのであるから、此の牧師が自己の功名心と將來の發展とを棄て、又家族の者の幸福利益を犧牲にして、教會友の懇望に應じたのは實に賞讃すべきことである。彼は一たび斯く決心してのちは、他の有力なる教會よりの招聘をも辭して、生涯この小教會の牧師をつとめた。のち暫くにして、一學校を設け、若干の收入を得て、一家の經費を支辨し、又この學校を其の地方の教育の爲めの便宜に供することも出來た。

『かみによりて　いつくしめる』は、彼がこの天晴なる決心を以て、ウェーンスゲート教會に留任した一七七二年の作で、この事件を記念する爲に作つたのだといはれる。成程この歌の內容を研究むれば、以上の如き事情のもとに作られたとの內的證據があるやうに見える。併し其の子が著した、彼の『傳記及び書簡』は、この點に關して、全く沈默してゐる。著者が一七八二年に、自作の

百六十六首と共に、この歌をも收めて發行した歌集がある。これは著者自ら其の正確を保證し、版權を有してゐる出版物である。『かみによりて』の歷史は、この出版物と同時に始まつたといふ說が、確實な意見であらう。

フォーセットも、ロビンソンの如く、青年時代にホイットフィルドの雄辯をきいて悔い改め、メソヂスト教徒となつたのだが、幾許もなく浸禮派に轉じた。この教派の人々が、如何程此の人を慕うたかは、既に說明した如くで、彼は此の教派の教職となり、生涯其の職に在つた。Doddridge（第廿四篇參照）と同じく、彼は安息日の禮拜說教を結ぶに、其の說教と同趣意の自作の讃美歌をしばしば會衆に歌はせた。されば其の作歌の數も前に述べた如く、百六十餘首に達したのである。此等の歌が、必らずしも文學的に價値あるとは云へぬが、その大多數は、所屬の教派內のみで歌はれ、少數は少くとも、英國の非國教會內で愛誦され、讃美歌作者として、彼の名を高からしめてゐる。

『主のしめしにより　あたへられし』も、此の少數中の一首で、これまた一七八二年自著出版の時、始めて世に出したものである。さらに『神よみめぐみを われにあふらせ』といふのもあるが、此の歌は果してフォーセットの筆であるや否や確かでなく、一七八二年の歌集中に收めてもない。彼の家族は、彼が此の歌の作者であると主張してはゐない。併し讃美歌學で信頼すべき大家等の意見は、彼を作者とするに一致してゐる。其の證據を詳しく述ぶるは、限ある紙面が許さないから、此處には只このやうな說のあることを記して置くにとゞめる。この最後の歌と最初の歌とは、『さんびか』にも『古今』にも、同じ姿で現れてゐる。

フォーセット作の此の三首のうち、第二の歌の譜は Dykes 博士（第四篇參照）の作で、第三の歌のは、佛國の哲人 Rousseau の作、第一の歌のは、それ〴〵國籍を異にしてゐる三人の作者、即ち一は James Watson（一八一六—一八八〇）、一は

Jeremiah Ingalls（一七六四—一八二八）一は Hans George Nägeli（一七六八—一八三六）の筆に成つたものである。この最後に記した獨逸人に關しては、既に本書第九、第十兩篇に於て記述した。Nägeli の名の附いて居る Dennis と呼ぶ譜は、一八四五年に Lowell Mason が加工したものである。『さんびか』にも『古今聖歌集』にも、此の譜を副譜として用ゐてゐるが、米國では多年之を正譜として用ゐた。併し其の〻ち Boylston（さんびか第壹編一四六）を正譜とする歌集が、米國にて數種出版された。米國には此の外に Ingalls 作の Kentucky を此の歌の譜に適用する人もいくらかある。Jeremiah Ingalls は、前世紀の初めのころ、米國で有名な唱歌者及び唱歌隊の訓練者であつた。第三の譜 Holyrood は『共通』讃美歌委員が、第一位に推薦した譜で、James Watson の筆に成つたメロデーから移したものである。ワッソンは、蘇國で有名な神學者亦作歌者で、Horatius Bonar（第二十一篇參照）と共に、當時弘く讀まれた一宗教雜誌を經營し、其の後ロ

ンドン及びエデンバラに於て、Nisbet 圖書出版會社の一員となつた。此の譜が "Psalms and Hymns for Divine Worship" といふ名の英語讃美歌集に收められ、初めて世に出たのは、一八六三年であつた。メロデー以外の和音は、Edward Francis Rimbault（一八一六—一八七五）の作といはれてゐる。リンボルトは、『さんびか』第一編一七九の Happy Day の作曲者で其の略傳は、本書第二十四篇の Doddridge の條に載せてある。

併し此の人々のうちで、最も有名なのは、佛人 Jean Jacques Rousseau（一七一二—一七七八）である。彼は Geneva に生れたので表面瑞西人であるが、一生涯佛國の爲に身を委ねた。彼は佛國革命前の半世紀に於て詩人的哲學者、さては宗教問題の論客としての活動範圍は、決して佛帝國内に限られなかつた。音樂の見地より云へば、彼は時に作曲し、音樂字書を著はし、又折々音樂に關する小冊子を著した人であると言へば足る。彼の筆に成つたものゝうちに、一の歌劇

がある。一七五二年始めて世に出た "Le Devin du Village"（村の占者）と名けたものである。此の中のメロデーから Greenville といふ譜は出たのである。獨逸の作曲者 Johann Baptist Cramer（一七七一—一八五八）が、一八一八年に此のメロデーより一のピアノ歌を作り、又それが形式を變じて一の讃美歌の曲として、一八二五年の頃より歌はるゝ事となつた。即ちこの年に John Rippon 博士が編纂した歌集の附錄として、初めて英國の社會に出たのであつた。（リッポンに關しては本書第三十九篇を見よ）

『すくひぬしエスよ　このゆふぐれに』は、夕の歌として、同種の歌の中で、最も良いものと信ぜられ、其の人心に及ぼす効力も Keble のや Bishop Ken のや、Lyte のや、Ellerton の筆に成つたもの等と同一であると云はれてゐる。此等の作者に關しては、はや既に本書で説明した。（本書第五、第三十一、第二及び第三十三各篇を見よ）。此の人々の歌と同じく、この歌も、英語の歌集中で、文

學的の一地位を占めてゐる。作者は、James Edmeston（一七九一―一八六七）といふ建築業者である。彼の作歌は、二千首にも上り、其の大多數は兒童用の目的で作つたものとて、文體も直截簡潔である。此の人は一生涯ロンドンに住し、建築業に從事したが、餘暇を用ゐて讃美歌に貢獻し、又敎會の爲め慈善のため種種なる事業に力を盡した。彼の祖先は會衆派に屬してゐたが、彼は國敎會に加はり、敎會内にて種々責任ある地位についた。今此處に評してゐる歌は、疑ひもなく此の人の傑作である。彼は或る夕方、アフリカ（アビシニア）旅行記を讀んで、心に感じた事を歌に言ひ現はしたのである。其の旅行記によれば、旅行者が一日の行程を終へて、夕方露營の天幕を張り、其の内にて夕の讃美を歌ひ、同行者は皆之に和唱するのが例であつた。此の旅行記の筆者は『夜になると、土人等の短い夕の歌である "Jesu Mahaxaroo" 即ち『イエスよ　われらを赦しませ』といふ聲が、露營を洩れて來る』というてゐる。十九世紀の初期に、カ

リフォルニヤの土人に實業敎育を施した西班牙人等が、毎朝これと同じ美しい習慣を有てゐたとの事である。エドメストンの歌は、一八二〇年に彼が自分の名を冠らせて出版した聖歌集に收めて、初めて世に著したが、廣く歌はるゝに到つたのは、東京南部敎區の Bickersteth 監督の祖父が、一八三三年に編纂した "Christian Psalmody"（キリスト敎徒のたゝへうた）といふ歌集にをさめた時からである。

當時エドメストンに作歌の刺激を與へた事が一つあつた。即ち或る人が、田舍家の祈禱會に適した讃美歌五十首を、二十磅の懸賞で募集した。此の募集者は『おもへばむかし　エスきみ』といふ兒童の歌の作者 Jemima Thompson（第五十一、五十二兩篇參照）の父で、名高い慈善家の Thompson であつた。"The Cottage Minstrel"（藁屋の樂人）と稱する歌集はこの募に應じたもので、その歌は全部エドメストンの筆に成つたのである。

『すくひぬしエスよ　このゆふぐれに』は、一九〇〇年、清國に義和團が蜂起して、一團の宣教師が、生命の危險に瀕した時にも歌はれた。當時の光景を記して『遠く故郷と友人とを離れ、異境に在つて、死に面した時、相互に親愛の情を以て、一同が聲を張り上げ、

えやみとほろびは　まはりにせまり　死の矢ははげしく　飛びきたるとき
たてなるみつかひ　われらをまもり　主ともにませば　おそれはあらじ

と歌ひ、かくて一同「かみのひめ給ふ所にかくれ」て、平和を得た。この人々のうちに、偶々横濱より來訪した一婦人宣教師も居つた』と云ふ。

エドメストンの作歌に用ふる數種の譜のうちで、Vesper Hymn といふのは、露國で有名な Dimitri Stepanovich Bortniansky（一七五二—一八二五）の作である。此の人は音樂史の上で、ロシアの Palestrina と稱せられてゐる。昔し以太利の Giovanni da Palestrina（一五二四—一五九四）が、拉甸教會の音樂を整へた如く、此

の人が露西亞教會、即ち希臘教會の音樂に系統を與へたから、此の名を得たのである。ボルトニアンスキーは、聖歌俗歌の作曲者で、Catherine 女王の治世に、Petersburg 即ち現時の Petrograd に於て、禮拜堂の音樂主任兼皇室附唱歌隊の指導者であつた。此の外に彼の著書から轉用したものが、尙一つある。即ち『さんびか』第一編二一六の譜で、ロシアの都の名を冠したものである。

『エスよこゝろにやどりて』は、Ira D. Sankey の "Sacred Songs and Solos"（聖歌と獨唱と）の中に收められ、一八七三年頃、初めて世に出てから、其の有効なることを記錄に示し、爾來米國で著名な歌集や、教會の標準的讃美歌集中に入り、遂に英語以外の國語に、飜譯されるに到つた。併しこの歌の作者に關して知るところは、James Nicholson（一八二六—一八七六）といふ蘇國系の米國人で、メソヂスト教會の教師であつたといふ事だけである。此の人の筆になつた歌はこれのみである。此の歌が非常に愛誦されるのは、其の譜の勝れてゐる爲で

ある。譜の作者は William Gustavus Fischer（一八三五―）氏で、本書第五十五篇に其の略傳を掲げて置いた。

『行きてはかへらぬ　つきひのながれ』の作者 David Nelson（一七九三―一八四四）は、一八一二年の戰役に、米國陸軍の軍醫であつた。其の後、長老派の敎師となり、米國の西南部で活動した。此の地方には、尙黑奴賣買が行はれてゐた爲め、彼は熱心に奴隷廢止主義を皷吹した。彼は敎職であると同時に、土地所有者であつた。彼の意見は痛く隣人たる地主等の反感を買ひ、爲に其の居住地ミゾリー州より逐はれ、僅に身を以て逃れて、ミスシッピー河畔に達した。幸に此の河の彼岸に達し得ば、其の地はイリノイ州に屬し、此の州にては既に輿論と法律との力によつて奴隷賣買を禁止して居た故、己が身は安全と思つた。彼はミゾリー州の河岸に繁茂してゐる叢の間に隱れてゐたが、幸にイリノイ州の友人が通行するを見、相圖を以てその注意を引き、事情を語つた上、暗夜に乘

じて小舟にて彼岸に渡ることを得た。

晝間彼が叢の間に隱れてゐた時は非常に危險であつた。追捕に來た者が携へてゐた鐵砲を以て、叢を分けつゝ搜索したが、幸に見つからなかつた。この樣な危難の場合に在つて、恐怖の念に驅られた時、不圖心に浮んだのが、此の歌の詞であつた。彼は之を古い封筒の裏面に書き付けた。これから次第に當時の人々に愛誦され、世人を益する有名な歌となつた。此の歌の譜 Shining Shore（輝く岸へ）は、George Frederick Root（一八二〇―一八九五）（第十二篇參照）の作で、それ以來常に用ゐられてゐる。ルートは此の譜を作り、一八五五年に初めて之を公にするに當り、大に躊躇したとのことである。それは此の譜を極めて簡單で、且つ平凡だと思うたからであつた。後日彼は『此の譜には其のメロデーに於ても、ハーモニーに於ても、世人を益する程の點は一もないのに』と公言したとの事である。然るに事實此の譜は、全世界を通じて有効であり、又其の有

効の期間に、終りが來ようとも思へぬ。

前のにやゝ似通うてゐて "Sweet by and by" といふ詞によつて思ひ出さるゝは、『はるかにあふぎみる　かゞやきのみくにより』といふ句ではじまる歌である。此の歌と曲とは、一八六七年に米國の西部 Wisconsin 州の Elkhorn 市に住んでゐた二人の友の友情から生じたものである。其の一人は Sanford Fillmore Bennett（一八三六―一八九六）といふ醫師で、作歌に巧な人であつた。一人は Joseph Philbrick Webster（一八一九―一八七五）とて、熟練な作曲家であつた。此の二人は從來共同して讃美歌を作り、之を發行したこともあつた。偶ゝウエブスタアが幽鬱症に罹り、散歩の途中ペンチットの診察所に立寄り、『何處か惡いのですか』と問はれた時、『別に大した事はありません、ぢきに快癒りませう』と答へた。此の時醫師は、何か爲すべき事を與ふるのが友の幽鬱を癒やす良法と思ひ、彼が先刻發した語句に基き、協力して一首の讃美歌を作らんと提議し、自分は机

に向ひ直ちに『はるかに仰ぎみる』の一首を物して、之をその友に示し、適當なる譜を附けよと希望した。作曲者も同じ速さで、今日普く世に知れてゐるメロデーを作り、之を自分が携へてゐたヴァイオリンに上せて試み、尋いでこれに和音を附け、一首完全のものに作り上げた折から、知友で唱歌を善くするものが二人訪ひ來たので、四人で合唱し、滿足なる結果を得た。其の一人が此の歌の將來を預言して、必らず不朽の名作と稱せらるゝであらうと言つた。此の預言は確かに事實となりつゝある。其後幾程もなく、此の歌は日曜學校用の歌集に收められて、世に公にされた。歌集は此の歌あるが故に、善く賣れた。のち多くの歌集に轉載され、各國語に飜譯され、譜は原作のものゝみが用ゐられ、世界到る處に歌はれてゐる。

『いつくしみふかき　主の手にひかれて』も亦非常に評判のよい歌で、前項の歌と同時代、即ち一八六〇年代に米國で作られた。作者は浸禮派の牧師で、現

今ニューヨーク州 Rochester の浸禮派大學の教授なる Joseph Henry Gilmore 氏（一八三四―）である。氏は曾て一八六一年か二年の頃、ヒラデルヒヤに於て、詩篇第二十三篇に基き、一場の演說をなし、彼を厚く待遇した一紳士の家に歸り、神が吾等を導き給ふことにつき、其の一家族と語り合ひ、其の談話中に、彼は此の一首を作り、之を其の家の夫人に示した。夫人はギルモーア氏に謀りもせで、同教派の一機關雜誌社にこれを寄せた。作者はこの雜誌に掲げられたのを見なかつたが、數年後にローチエスター教會の講壇に、空位を生じ、此の歌の作者も候補者の一人として、其の教會にて教會用の歌集をさぐり、歌を歌はんとした時、偶然自作の歌が其の書中に收められ、しかも William Bradbury が、一八六三年に物した譜が附けてあつたのを見た。（ブラットベリーの事は、本書第十六、三十一、四十篇に在り）。ギルモーア氏の原作には、折返しを附けて置かなかつたが、ブラッドベリーが之を加へた結果は、此の一首をして一層有効なる歌とな

らしめたのである。ブラッドベリーの譜は、實によく此の歌の調と精神とを捉へ得てゐる。實際この樣な適當のものを作り得た者は、極めて少いのである。近世の歌集で、この歌と譜とを離して用ゐる事は極めて稀である。

著者は今筆を擱かんとしてゐるが、同時に『かみともにいまして　ゆくみちをまもり』を略說して、本書の結末としたい。此の一首の作者は、米國の首府ワシントンにおける、主要なる會衆派の牧師 Jeremiah Eames Rankin（一八二八―一九〇四）博士である。此の人は、そのゝち同府に設けてある黑人青年を教育する Howard 大學の總長となつた。これは彼が尙牧師の頃其の地方の必要に應じて作つた歌であるが、何處でも此の歌の必要を感ずることゝなり『さんびか』及び『古今聖歌集』にある譜で歌ふのが慣例となつた。譜は William Gould Tomer（一八三二―一八九六）の作である、彼は米國南北戰爭の時、北軍の一士官であつたが、後學校教師及び雜誌記者となつた。ランキン博士は、自作の歌を此の人の

許に送り、之に適當な譜を附けんことを依頼し、又作曲專門の某にも同一の依頼をなした。兩人とも依頼に應じて作曲したので、博士は之をワシントン教會の有名な盲目オルガニスト J. W. Bischoff に送り選擇を依頼した。此のオルガニストは學校教師の物した簡單な譜を擇んだので、其の後此の譜が用ゐられるのである。此の作曲者は、歌詞をも作り、歌集を編纂し、又散文の著述も少くない。併し彼が世人に記憶される所以は、基督の教會に此の別離の歌を與へたからで、よしそれが唯一の理由でないとしても、そはその理由の主なるものである。

讃美歌物語 終

附錄

日本の讃美歌について

別所梅之助

一『基督教聖歌集』

私が信者になりましたのは、明治二十年の事でした。所屬の教會は、當時、神田今川小路にありましたメソヂスト教會でした。そこで初めて手にしましたのは、J. C. Davison 氏の編輯なされた『譜附基督教聖歌集』で、その前年、即ち明治十九年に横濱で出版になりましたもの、一から二百四十四までが、まづあたりまへの讃美歌、二百四十五、六、七の三首がチャント（讃詠）、ほかに十首の頌歌が添うてゐました。この書は、デビソン氏（後の老博士）主任のもとに、岩野泡鳴氏が助手として盡され、松本榮子（のちの家永夫人）なども助勢せられたやうに承つてをります。一般に歌の曲がおもしろいといふ評でし

た。詞は、なだらかで無かつたかも知れません。"A charge to keep I have"といふ歌の譯にしても

かみをあがめ　おのがたまの
すくひをもとむるは　わがつとめなり

とあります。おなじ歌にしても、後の『新撰讃美歌』には、

われはかたく　まもるべきの
つとめあることを　こゝろにとむ

とあり、現行の『さんびか』には

われはかたく　こゝろにとむ
まもるべきつとめ　身におへるを

とあります。なにせよ、この『すく』『つと』などをはじめ『たす』『あゝ』などを一音に歌はせますのが、『基督教聖歌集』では目立つてゐました。それを使

つてゐましたのは、メソヂストの三派、即ち美以、南美以及び日本メソヂスト（カナダ）の三團體と、福音協會と位でした。それより以前に、メソヂストの諸派は、やはりデビソン氏の編輯した歌集を用ゐてゐました。それは歌の數も少うございました。尤も私の手控に『譜附基督教聖歌集、メソヂスト、明治十七年、横濱、二百四十七首、外に頌歌』とあります。それが正しくば――大抵正しさうですが――今、私の手許にあるのと同樣のものが、明治十七年に出來てゐたのでせう。

なにせよ、明治二十年前後に、田村直臣氏の數寄屋橋教會なり、小崎弘道氏の番町教會などへゆきますと、『讃美歌』といふ小さい横本を使つてゐたと覺えてゐます。明治十八年三月二十四日初版、江藤書店發兌、歌の數百六首ほどありました。教友に大友泰一郎氏といふ高等商業學校の學生がありまして、

われはゝのふところを　しとねとなして

とかいふ親子の愛情を歌つたその中の長篇をよく歌つてゐました。まちがひかも知れませんが、私はそれを奥野昌綱翁の作だときいてゐました。それは明治廿三年に出版になりました『新撰讃美歌』には洩れました。

二　明治七年以降の歌集いろ〳〵

私が使ひましたのでなく、ちよつと見せて貰ひましただけを手控から抜いて見ませう。

一、『讃美歌』明治七年發行、歌の數廿首。奥野翁が版下をかゝれたのださうです。三と四とは雨森信茂氏（？）、六と七とは奥野翁、九と十一とは故本多庸一氏とバラ氏との筆だといふ事でした。

世界よ、よろこべな　主がきたるぞ
あゝ天地と萬物は　その主を見よ

といふやうな歌がありました。

二、『教のうた』。おしゑとふりがながついてゐました。明治七年六月、プレスビテリアン派、歌の數十九首、この方が前のより少し古いのかも知れません。

三、名稱不明（讃美の歌？）、日本に最初の組合教會が組織せられた時の歌集ださうです。明治七年四月神戸にて發行、木版小本、歌の數八首。

われの神に近づかん　よしや憂に忍びなん
われ歌ふべき吾の神に　近付かましともならん
さまよふまゝに我らも　目さへくらみ猶うたふ
岩の枕ねむらん時に　神と吾やあらんかも

といふのが、"Nearer my God to Thee" の譯でせう。それでも割合に、この集は日本風のやうでした。前田泰一などいふ方の名が見えます。

四、『讃美のうた』明治七年、H. Stout, J. C. Davison, A. Segawa, K. Asuga とあります。日本人は、瀬川淺氏と故飛鳥賢二郎氏とでせう。長崎で、ダッチ、リフォームド、メソヂスト、兩ミッションの協同して編纂した集といふのが、これでせう。

五、『聖書の抄書』『Seisho no Nukigaki』明治七年十一月(?)ナタン、ブラオン氏編、バプテスト教會第一の讃美歌のやうです。

Wa-ga maye ni
わがまへに

といふやうに、ローマ字と交互にかいてあります。

六、『さんびのうた』(?)、明治七年十二月發行、組合教會、J. C. Berry 氏編。

七、『さんびのうた』明治七年十二月、神戸印行、組合教會、J. Davis 氏編。

これとおなじローマ字版のは、明治八年發行、Hiogo(兵庫)とあります。

いと高き所においては

といふやうな調子です。

八、『さんびのうた』明治八年、組合教會、J. H. DeForest 氏編、歌の數三十三首、チャント六首、小形の横本、ローマ字版のもありました。前の七年十二月版と少しより違つてゐません。

九、『改正讃美歌』明治九年五月、ブレスビテリアン、十字屋印行、小形の横本です。Old Hundred を

めぐみあるかみを　　さんびせよ天下の人
さんびせよ天の軍勢　　父と子と聖靈

とあります。少し『てにをは』が足りないやうです。

十、『使徒公會の歌』明治九、十年、聖公會第一の歌集でせう。小形の横綴、W. B. Wright 氏編、歌數廿六首。

十一、"Hymns and Tunes"『字太登不止』と篆字でかいてあります。明治九年九月、パプラスト、P. Brown 博士編、歌數七十六首、たしかソルファがついてゐたと存じます。

十二、『讃美歌』、弘前の山鹿元次郎氏藏書、黄表紙の横本、歌の數二十三首、明治八九年ごろのかと思はれます。

たのしきくにあり　せいとぞすめる
うきをばしらず　たへせぬひる

とあります。

十三、『讃美歌』明治十年、メソヂストのデビソン氏の編輯したもの、文部省の『小學唱歌』ぐらゐの大きさの横本、歌の數五十三首、頌歌四つ、譜七つ。譜つきの歌集は、これがはじめでせう。

十四、『讃美歌』年代不明、メソヂストのデビソン氏編、まへのを増補したもの、歌數七十六、頌五つ、譜は九つ。

十五、『讃美の歌』明治十年、聖公會、H. J. Foss 氏（のちの監督）編、横綴の小本、歌數六首。

十六、『眞神讃美頌』明治十一年、大阪川口英三番、Rev. C. F. Warren. 聖公會、朝の歌、晩の歌など三十首を收めた小本です。

十七、『さんびのうた』明治十二年十一月、Rev. W. W. Curtis 氏（A. B. C. F. M.）の編、歌五十七首、チャント六首、There is a happy land を

たのしきくには　天にあり
しんじやはさかえて　かがやく

としてあります。『新撰讃美歌』の

たのしきくに　てんにあり
聖者はさかえ　かゝやく

に近づいてゐるさまが、しのばれます。

十八、『基督公會之歌』　明治十四年、聖公會、H. J. Foss 氏編、廿九首あります。

十九、『讃美歌』　明治十五年、原胤昭氏藏書、日本紙刷、歌の數百三首。

二十、『改正讃美歌』　明治十五年五月、W. W. Curtis 氏編、歌百三十六首、チャント十四首。

廿一、『眞神讃美歌』　年代不明、聖公會、函館にて出版、歌數九十九首、頌歌一首。

廿二、『聖公會歌集』　明治十六年九月、チング氏編、歌百四十五首。

廿三、『讃美歌』　明治十八年一月、組合教會、大阪の今村謙吉氏飜刻、歌數百三十六首、チャント十四首、第廿のとおなじほどのものでせう。

廿四、『キリスト教聖歌集』（ローマ字）、明治廿年、メソヂスト、イビー氏。

廿五、『新撰讃美歌』（譜なし）明治廿一年五月、明治廿三年十一月の『新撰讃美歌』（譜附）の版のまへに出たのです。

以上の廿五種は、二三種のほかは、ちよつと拜見しただけのものですから、記述に間違もあらうかと存じます。なにせよ、これだけによりましても、明治七年、即ち一八七四年といふ年は、大層歌集の出來た年であります。そして當初は發行地も、横濱、兵庫、長崎、函館といふやうに、開港地に限られてゐました。そして

よいくにあります　たいさうゑんぱう

とかの時代は知らず、それ以後においては、メソヂストのデビソン老博士、聖公會のフォス監督、バプテストのブラオン博士など、この道に盡されたさまが思ひやられます。

三　『新撰讃美歌』『基督教讃美歌』『古今聖歌集』

明治廿三年は、日本の讃美歌界にとつても、忘れられない年でせう。その年の十一月はじめて一致、組合、兩教會の委員の手によつて譜附の『新撰讃美歌』が出ました。（詞だけのは、廿一年に出ました）。歌の詞は、主として松山高吉翁、故奥野昌綱翁及び植村正久先生がおつくりになり、譜の方は、George Allchin 氏の心を籠められたものです。

あめにいまして　よををさめ

の賑はしいをりかへしなど、氏の作曲とか承つてをります。（現行『さんびか』第一編三百七十）。音階をやゝ下げてありますのも、この歌集の特徴でせう。

さりにしひとの　こしかたを

かへりみすれば　うつせみの

もぬけのからと　なりしかど

こゝろはいかで　きえぬべき

といふ二百六番（現行『さんびか』第一編三百六十七參照）は、明治女學校の創立者、木村鐙子女史のお葬式に、植村先生がよまれたのだとか聞いてをります。故奥野昌綱翁の歌には、いかにも情熱がありました。百七十五の

われやめるときに　なぐさめあり

われらにかはりて　血をながし

耶蘇のくるしみを　おもひやれば

われらのいたみは　とみにされり

は、故翁の病中の作です。それは現行『さんびか』（第一編三百廿五參照）に入つても、以前のおもかげを見せてをります。松山翁の作は、伺ひましたので、わりあひに多く存じてをります。

かみのめぐみ　主エスのあい

ゆたかにみつ　このみとの

といふ第廿五（『さんびか』第一編廿三の原歌）は、靈南坂教會新築のをりの作とか伺つてをります。その他

主はわれの　牧者にませば　四十五

めぐみにとめる　まことのかみは　五十

めぐみにとめる　わがかみエホバ　五十三

耶蘇きみの　すくひの水の　なかりせば　つみのほのほに　われほろぶべし　八十

なぐさめを　そゝぐみたまよ　うきくもの　かゝるこゝろを　ひらきみちびけ　九十二（さんびか第一、百十六）

つみのけがれに　おほはれて　百八

われのしろ　われのちからと　たのむかみ　ともにしませば　あだはものかは　百三十一

うきことも　なやみもたえず　せまれども　すくひのしろに　よりてぞふせがん　百三十四

わがたましひよ　おそるゝな　百三十七

かみなくば　いかにしてかは　なぐさめなん　みなほろびゆく　たのみなきよに　百八十九

かみのみめぐみを　たゝへうたひ　二百四十

みかみのたまへる　うちの光を　二百四十九（『さんびか』第一編三百九十三の原歌）

あめつちの主なるおほかみのみては　二百五十七

などの原作のほかに

かみのめぐみ　四十四（『さんびか』第一編五十五）

などの譯歌も數々あります。他の二先生のも多い事でせうが、確とした所を伺ひませんから、わざと省いておきます。

總じて『新撰讃美歌』にも、『基督教聖歌集』にも、五七五七七の短歌體は、可なり多かつたのです。それが譜の方では、どうも成功しない傾向があつて、現行『さんびか』には、ずつと少くなりました。讀まれるのでなく、歌はれるものとしては、これも自然かも知れません。しかし短歌の律に基いたよい調子が、もつと出來てもよからうにと存じます。

なにせよ、『新撰讃美歌』あつて、日本のキリスト教會は、はじめて歌集らしい歌集を得たのです。當時、女學雜誌で、故山田美妙齋がこの集をほめてゐたやうでした。

『基督教聖歌集』は譜の方で一歩さきへ進んでゐたかと存じますが、やゝ落着が缺けてをるやうで、詞も蕪雜な點がないでもありませず、題なども、支那の

讃美歌集の感化を免れませんでした。『新撰讃美歌』のは、チャントも立派でした。

明治廿八年には『基督教聖歌集』の增補したのが出版になりました。主任たるデビソン氏の外に、山田寅之助氏も、力をかされたさうです。『新撰讃美歌』の歌の數、チャントを入れて二百八十六首に比して、これは頌歌のほかに、四百廿九首あります。『君が代』もこの書で讃美歌集中に收められました。『國歌』といふ題目の下に、今まで『國風』とか、『國の祝』とかいふ種の歌がおかれました。明治三十三年に發行した『基督教聖歌集』には、何の斷り書きもありませんけれども、前のに比して歌の語句は、やゝ違つてゐます。これは廿八年のに可なりひどい間違がありましたのを、限られた範圍で、私が直したのです。

私は、どうしてか、その頃の聖公會の讃美歌とバプテスト教會の讃美歌とをなくしてしまひました。バプテストのは譜附で、『基督教讃美歌』としてあり

ました。明治廿九年に出版になりましたのが一番よく、それまでに出たパプテストの歌集の比でありませんでした。見た所、明治十七年版の『基督教聖歌集』より厚く、廿八年版のより薄うございました。そのうちで私の記憶に殘つてゐますのは、現行『さんびか』第一編五十六の

かみのめぐみは　いとひろし

の原歌になつたもので、小田原に傳道してをられた天野某氏の作だときいてゐます。尤も原歌は、第四句切れ、現在のは第二句切れで、趣がちがつてゐます。聖公會の歌集も、さう大したもので無かつたやうでした。あれは松山翁が加つて、『古今聖歌集』といふ古典風な銘をうつて、明治三十四年のクリスマス頃に現れるに至つて、はじめて整つたやうに存じます。『古今聖歌集』は歌數四百十二首、おごそかな、堂々たる調子の曲が多うございます。品のよい集です。委員長はフォス監督、委員中には今井壽道氏の名も見えてゐます。この歌

集中の百廿五首を『共通』の歌といひまして、私どもゝ多少關係いたしてをります。

四　『共通』の歌、「さんびか」

話が元へ戻ります。明治三十三年の四月、大阪で福音同盟會の大會がありました時、原田助氏が讃美歌を同一にしたいといふ議案を提出なさいました。前に記しましたやうな次第で、歌は各派によつて、それ〴〵違つてゐました。それは極めて不便ですが、さりとて新案もたやすく行へさうに思へませんでした。然るに提出者は、よし歌集は異つても、その中の重な歌の詞と譜とを一にしたいといふのであるとて、それが通過しました。それとどれほど關聯してをつたか存じませんが、三十四年には、各派の宣教師諸氏が、銀座會館でしばしば會合なされた末、百廿五首の歌を選び、それを譯しなほし、作りなほすと

いふ事になりました。私は三十四年の三月から、そのお手傳をする事になりました。三輪源造君などは、もつと前から關係なすつたでせう。いろ〳〵仕事の方針も變つた末、この事業の爲に松山からオルチン氏のをられる大阪へ移られた三輪君と、京都の湯淺吉郎氏と松山翁とが起草委員とでもいつた格で、逗子に集り、新に稿を起されました。聖公會では、この百廿五首を入れる爲だけに、稿成つた歌集の出版を控へてゐるといふので、私どもは暑中にそれをしあげるつもりで輕井澤に集りました。

輕井澤で、議場とも、宿泊所ともしたのは、日本鐵道會社の技師長故毛利男のまだ半成の別莊でした。落葉松の枝をのしたる高原の一莊に、聖公會のフォス監督、議長たり、テー・エム・マクネヤ、三輪源造の二氏書記たり、松山翁、浸禮教會の藤本傳吉氏、バアシレー氏、日本基督教會の和田秀豐氏（のちには湯谷磋一郎氏）、メソヂスト教會の櫻井成明氏と私とが居ならびました。このた

びの歌の基礎をおかれたオルチン氏は本國にかへられ、スペンサー氏は旅行中、湯淺氏は逗子から家に歸られたさうです。前から手を入れてあつたので、百廿五首の歌の修正は、十日ほどで極りました。さて日本基督教會、組合教會、浸禮教會の方々は、この上更に多くの歌をつくり、新なる歌集をこしらへるといふ相談が出來てゐるので、メソヂストたる私は、如何にも羨しい事と思つてゐました。

然るに歸京後、幾ほどもなくメソヂスト教會でも、その事業に加はる事になり、私も委員に擧げられました。委員の顔觸は、あまり變りませんでしたが、聖公會の方は既にあらず、基督教會の方が一人加はられました。歌の數も三百五十首ぐらゐといふ豫定でしたが、この派の、彼の派のと持ちよつて見ますと、それも入れたく、これも入れたく、つひ〳〵殖えてしまひました。原案は、湯谷、三輪の二君と私とで拵へるといふ事になりました。私どもが用ゐま

した材料の中、日本語のでは、日本基督教會の委員が編輯しておかれた讃美歌の原稿が、『新撰讃美歌』や、『基督教聖歌集』や、『基督教讃美歌』にもまして、立派でした。その原稿といふのは、植村、和田、湯谷の諸氏の手になつたものでした。外國語の材料は隨分夥しいものでした。私ども三人は、一週に三日、一日おきに集つて、どうにか歌の詞をまとめ、他の三日に、三輪君がマクネヤ氏の許にいつて、出來たのを樂器にかけて貰ひました。そして合はなければ作りかへ、あへば月二回ほどの本會議にかけました。斯うして明治三十四年十月のはじめから三十五年九月のはじめまで、ざつと一年間（但し三十五年八月は毎日）に、さんびか第一編の大多數の歌をつくりあげました。その後、歌を加へるやら、詞の修正、歌の排列、印刷、校正、いろ〳〵な事があつて、三十六年の十一月にやつと出版いたしました。その前にオルチン氏も再び御盡力下さるやうになり、お蔭でソルファもつきました。その三年の長い間、委員の中心と

なつて、おはたらき下すつたのは、テー・エム・マクネヤ氏でした。コーツ、スペンサー、和田、小崎、藤本の諸氏もそれ〴〵御盡しなさいました。

『さんびか』の內容を私から申すのは、異なものです。以前からの歌をあれこれと直したり、新しく飜譯をしましたり、みな三人で致しました。三人の中、湯谷君は長兄であります。三輪君また詩境を得た方です。私は最も散文的でした。第一編のうち

よのなかに　ふみてふみは　百廿七

にほひしはるも　ゆめとなりて　三百三十九

ひがしのはるは　ほの〴〵と　三百八十六—九

などは、湯谷君の原作です。

のやまもくさきも　のどけきはるを

といふ趣ふかいのは、三輪君のです。　六十九

はにふのやどの　三百八十五
をしばがきの

は藤本君のです。

いちかをきそひ　たまをみがく　三百八十四
いまもむかしの　ためしとて　三百九十五

は、私のです。然し、種々存念もありましたので、第一編の方は、誰の作といふ事を記しつけませんでした。

『さんびか』第二編も、マクネヤ氏が中心になつて出來た本です。明治三十九年ごろからかゝつて、四十二年の十二月に發行しました。これは前のとはやゝ違つた方法をとつて編輯しました。歌なり、譜なりは、おもにマクネヤ氏が選定なされ――他の委員がいひ入れたのは無論の事ですが――それを三輪君だの、私どのが飜譯するなり、譜にふさはしい歌をよむなりしました。三輪君は、もう京都にお出でゝしたから、原案は銘々につくりました。湯谷君も澤山

飜譯して下さいました。今同志社にをられる原口愛子、今カナダにをられる松永文雄夫人にも、助力を請ひました。今度のは、先輩のに基かないのですから、三輪君のにも、私のにも、公けに署名しました。最後の修正は、やはり夏輕井澤でしました。四十一年だつたかも知れません、稲垣信、小崎弘道の兩先輩とともに、かなり長い間、私どもは『つるや』の別莊にゐました。歸るころには、どの鐵道もあらしにこはれ、足利へまはつて、千住近くにつき、一人まへ一圓宛の船賃を拂つて、水におほはれた田の中を、二三十町小舟で渡つたりしました。

デビソン老博士は、上海からか、米國からか、譜のタイプを買つてきて、一つづゝ捺しては、讃美歌をこしらへられたと、いつか言はれました。私どもは、校正の小言などいふにしても、そんな苦勞をしたのでありません。一に先輩のあとをふみ、先輩のおかげを蒙つたのです。それでゐて先輩の歌に手を入